

論 文

田辺尚雄の沖縄・八重山諸島音楽現地調査 (1922年)

— 「田辺文庫」を基礎資料として—

Okinawa and Yaeyama Islands Musical Field Survey by Hisao Tanabe in 1922
: Based on the Tanabe Library

高橋美樹 (高知大学教育学部・音楽学研究室)

Miki TAKAHASHI

Laboratory of Musicology, Faculty of Education, Kochi University, Kochi, Japan

ABSTRACT

This study analyzes the 1922 Okinawa and Yaeyama islands musical field survey conducted by Hisao Tanabe, the pioneer of Japanese ethnomusicology. The survey consists of sheet music and other documents obtained during an Okinawa investigation, and was accepted into the Tanabe Library at Okinawa Prefectural University of Arts after analysis of the survey's results in *Expeditions in Micronesia, Formosa and Ryukyu* (a monograph by Tanabe). The following four conclusions can be drawn from this current paper. First, an investigation was initiated to provide audiences in mainland Japan with Okinawan music, despite complications concerning a scheme by Tanabe's researcher in Okinawa. Second, Tanabe's investigation was made possible by leveraging folklorist Kunio Yanagita's personal connections, who recommended the Okinawa survey. Third, as a culmination of Yaeyama folk-song research, Tanabe produced 23 SP records of folk songs from the Yaeyama Islands via the Nitto Record Co., Ltd. in 1926. Fourth, Tanabe's evaluation showed the folk songs "Yunta" and "Jilaba" as ranked highest in popularity of those from the Yaeyama Islands.

1. はじめに

本稿の目的は、日本における民族音楽研究のパイオニア・田辺尚雄(1883-1984)が1922(大正11)年7月20日～8月13日に実施した「沖縄・八重山諸島音楽現地調査」について、田辺本人が残した記録と沖縄で準備に奔走した人々の記録を照合させることにより、調査の全体像を明らかにすることである。

田辺は、日本で初めて民族音楽研究のための現地調査を実施した人物である。1919年啓明会から「東洋音楽理論の科学的研究」の補助費として、3年間で6000円を受諾した(田辺1923e:1)。そして、1920年代～1930年代に朝鮮、台湾、沖縄、中国、樺太、南洋、満州を精力的に調査した。先行研究として、田辺の朝鮮調査については植村1997、山本2008、山本2011、台湾調査については植村2003、樺太調査については篠原・笹倉2007、篠原・笹倉2008が挙げられる。山本は田辺が1921年に実施した朝鮮調査が「研究、啓蒙、交流という面において、現在にまで影響を及ぼしている」(山本2008:318)ことを指摘した。沖縄でも、1922年の現地調査が同様の影響を及ぼし、沖縄音楽史上最大のエポックメイキングとして位置づけられる。

沖縄県立芸術大学附属図書館「田辺文庫」には、1922年の沖縄調査に関する文献、楽譜、レコード等が所蔵されている。本研究では2002年に長男・田辺秀雄氏から寄贈されて以来、研究者にほとんど注目されてこなかった田辺文庫を活用する。田辺の沖縄調査に関する先行研究としては、久万田1996、鈴木2014が挙げられる。しかし、それらの研究は田辺の著書と田辺文庫の資料を綿密に照合させたものではない。本研究では、沖縄調査に関する記録を時系列に整理するのみならず、調査する側と受け入れる側、双方の意図と成果も導き出す。

なお、引用文の旧字体・旧仮名遣いは新字体・新仮名遣いに改めた。また、□は解説不明文字を示す。

2. 沖縄調査に関する文献

田辺は沖縄調査に関する記録を著書、雑誌などに数多く残している。主な文献は以下の通りである。ただし、田辺の記述に関しては調査終了後、最も早く刊行された雑誌『音楽と蓄音機』の連載「琉球及八重山群島音楽研究旅行記(1)-(6)」(1922-1923)を中心に考察した。

田辺 1922a～1922c、1923b～1923d「琉球及八重山群島音楽研究旅行記(1)-(6)」『音楽と蓄音機』

田辺 1922d～1922m「世界第一の民謡を持つ八重山(1)

～(10)」『東京日日新聞』

田辺 1923e「台湾及琉球の音楽に就きて」笠森伝繁編『(財)啓明会 第8回講演集』

田辺 1923f『第一音楽紀行』

田辺 1927『島国の唄と踊』

田辺 1968 東洋音楽学会編『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』

また、調査の準備に奔走した沖縄の人々の記録として、以下を取り上げた。

1922年3月26日～7月30日『沖縄タイムス』記事12件

山内盛彬 1922a～1922d『沖縄タイムス』記事4件

山内盛彬 1922e年10月「田辺先生来県印象記」『音楽と蓄音機』

3. 沖縄調査の準備過程

田辺は当初、1922年3月25日～4月に実施する台湾音楽調査の帰りに沖縄県八重山諸島に立ち寄り、調査する予定であった。しかし、台湾・基隆発八重山行きの船便が不定期のため、やむを得ず八重山調査を諦め、4月26日に帰京した。だが、調査中止の報告を受ける前から、沖縄では田辺を迎える準備が着々と進められていた。

そこで、3.1では田辺が沖縄音楽調査を計画した経緯を辿る。3.2では田辺を迎える準備を進めた沖縄の人々の行動を整理する。3.3では一旦中止となった沖縄調査が実現するに至った要因を探る。3.4では沖縄側が計画した調査日程、さらに、沖縄音楽研究家・山内盛彬(1890-1986)が提案した田辺に披露すべき音楽ジャンルについて整理する。

なお、3.1～3.4の経過は、表1「田辺尚雄における沖縄音楽調査・関連年表」を参照されたい。

3.1 田辺が沖縄調査を計画した経緯

3.1.1 中原はる子・金城義昌との出会い

田辺は1920年～1922年にかけて、沖縄音楽に造詣の深い沖縄出身者と出会う機会が増え、研究の動機が生まれつつあった。田辺は1920年に中原はる子と出会ったことについて、「東洋音楽学校の夏期講習会に琉球の音楽家の中原ハル子という婦人が居られて、此の人が私に琉球音楽研究に就て大に勧誘されたので、私は愈々決心をしてその時機を作ることに就て具体的の方針を立てることを始めた」(田辺1922a年9月:35)と記している。さらに、田辺直筆の研究記録『音楽見聞録』には、1920年9月に中原から聞いた話が掲載され

ている。^{さんしん}三線の調弦や爪の素材、琉球の箏の調弦、三線と箏の担い手に関する記述ともに、「琉球の箏の六段の曲は内地の六段曲と殆ど同一なり」¹⁾と沖縄調査へつながる記録がみられる。

また、中原を通して、沖縄県立第一中学校教諭の樋口、沖縄の音楽教育に貢献した金城義昌²⁾と交流を深めるようになる。田辺は「沖縄の中原女史や金城君などから送られた琉球音楽の記録書籍楽譜等に見ても、八重山群島に非常に見事な優秀な民謡が存在することを見て、是非之を調べたいと思って居た」（田辺 1922a 年 9 月:36）と述べ、沖縄出身者から提供された文献、楽譜を通して、八重山民謡への興味を次第に深めていった。

3.1.2 八重山研究勤める柳田国男／宮良当壮の生演奏

日本民俗学の第一人者・柳田国男(1875-1962)は 1921 年 1 月～2 月に沖縄調査を実施した。石垣島を訪問した際、案内役を務めたのは八重山の民俗学者・

^{きしゃばえいじゅん}喜舎場永 珣(1885-1972)であった。八重山の民謡や舞踊で歓待された柳田は「この民謡や音楽や舞踊については私は専門の知識をもっていないから来年その道の権威者を派遣して研究させよう」（喜舎場 1977:368）と話したと言う。田辺は 1921 年 3 月、柳田から八重山民謡の研究を勧められ、調査を実現する大きな原動力となった。田辺はこの出来事を次のように記している。

（筆写注：1921 年）3 月の三越の流行会席上で民謡伝説の研究者として名高い柳田国男君から是非八重山島の民謡を研究するようにと勧められて、同君から八重山島の測候所長岩崎卓爾氏…中略…や白良小学校長喜舎場永珣氏(同島民謡研究の熱心家)へ直接に紹介して下すった。（田辺 1922a 年 9 月:36）（下線部筆者）

田辺は 1920 年 11 月三越の流行会へ入会した（1921 年 1 月『三越』:28）。三越 3 月の流行会は 1921 年 3 月 18 日（於：三越 3 階休憩室）に開催され、田辺は講演「正倉院の楽器に関する研究と発見」を蓄音機によるレコード鑑賞も交えながら行った（1921 年 5 月『三越』:32）。同記事には 3 月流行会の出席者として、柳田の名前も記載されている。この記録により、田辺が柳田から八重山民謡研究を勧められたのは、1921 年 3 月 18 日三越 3 月の流行会の場であったと判断できる。翌 1922 年 8 月 1～3 日の八重山調査で田辺の案内役を務める岩崎卓爾(1869-1937)や喜舎場も、柳田から紹介

されていた。

1921 年 4 月 18 日三越 4 月の流行会では、柳田が「八重山の歌と歴史」³⁾と題して講演した。この時、八重山民謡を実演したのは八重山出身の宮良当壮である。宮良の日記には次のように記されている。

4 月 13 日(水)雨。三越呉服店内の流行会幹事の黒田鵬心様から来信。来る 18 日午後 5 時から、柳田先生が「八重山の歌と歴史」と題して御講演なされるので、その時僕に三味線弾きをして呉れという。柳田先生からも来信。東京の文人・芸術家・記者など名士多く参らるるに付君を御紹介申すつもりと。（宮良 1984:283）（下線部筆者）

『三越』11 巻 5 号には、宮良が三線伴奏で歌った八重山民謡として《鳩間島節》《与那国ぬ小猫節》《でんさ節》《とまた節》《奥ぬ宮童節（ママ）》《小浜節》が挙げられた。同記事には「詞は書いたものを見ていようやく解る位」「柳田氏は猶歌う間にも説明を加えられ、写真や花染手拭の一片も見せられ」（1921 年 5 月『三越』:32）とあり、出席者に歌詞を配布し生演奏を伴う講演だったことが伺える。

宮良の日記によると、柳田と宮良が初めて会ったのは講演の約 1 年前、1920 年 6 月 30 日⁴⁾であった。宮良は当時、東京で金田一京助に言語研究を師事しており、金田一を通じて柳田を紹介された。

次に、柳田は田辺に宮良を紹介する。宮良の日記には「1922 年 2 月 27 日(月)…中略…金田一様学校にて曰く、柳田氏より電話ありしが田辺尚雄理学が琉球へ音楽研究に行くに就いて三味線を少し弾いて聞かされたしとのことなりき」（宮良 1984:321）、「3 月 9 日(木)…中略…午後から田辺様方へ出掛けた。暫く言語のことを話してそれから楽器を弾き出した」（宮良 1984:321）とある。田辺も「宮良当壮氏が目下東京の国学院大学に居て同島の言語を研究して居られるが、此の人が自ら蛇皮線を探って同島の歌謡を奏されるので此の人を（筆者注：柳田が）拙宅へ紹介された」（田辺 1922a 年 9 月:36）と記した。宮良の日記には《川平節》という記載があり（宮良 1984:321）、田辺宅では八重山民謡を中心に演奏したと思われる。

田辺が沖縄音楽の中でも、とりわけ八重山民謡に深く興味を持った背景として、柳田の強力な勧めと宮良による生演奏体験が挙げられる。

その後、宮良は三線楽譜『^{くんくんしー}土工四』を田辺から貸借して筆写するなど、交流を深めていく（宮良 1984:323）。

また、宮良は1922年3月、田辺に兄の宮良当陳や岩崎卓爾などを紹介し、八重山調査の折には音楽・舞踊を披露するよう依頼している（宮良1984:323）。

3.2 沖縄側の準備過程(1)【1922年3月～4月】

次に、沖縄の人々が実施した準備活動を整理する。

1922年3月26日『沖縄タイムス』に“田辺が沖縄音楽調査のため来県する”という第一報が沖縄県民へ発表された。記事で、田辺は「宮内省雅楽部講師理学士」と紹介されている。また、全那覇尋常校訓導の金城義昌宛てに田辺が「今回台湾、蛮人音楽の研究に行く帰途来県する」と通知した、とある。沖縄側はそれを受け、気運の高まりを下記のように示した。

中央から研究又は調査に見えた斯界の大家と云っても全く無かったようであるが、今回計らずも音楽理論では日本の権威とされて近來声名高き田辺尚雄氏が来県されることとなったのは琉球音楽界の福音と云うべく、正常に理解され且つ県外に紹介される絶好の機会が来たのである。(1922年3月26日『沖縄タイムス』)(下線部筆者)

“「中央」から調査目的で「沖縄」を訪問する研究者”“沖縄音楽を県外へ向けて紹介”など、「沖縄」←→「中央」という双方向の構図が読み取れる。そして、同記事は中央という〈外向き〉に沖縄音楽を発信する機会として、田辺の来訪を捉えていた。田辺の来訪を同様の機会として捉えた記事は、他にも見られる。

琉球音楽の芸術としての価値並に音楽理論から見ての批判同じく琉球舞踊の芸術的価値などが氏の調査に依って中央で紹介される好機は今回の氏の来遊を惜いて他に求め難いこと。(1922年7月12日『沖縄タイムス』)(下線部筆者)。

さらに、沖縄音楽の真価を問う機会と捉えた下記の記事もある。

琉球音楽を紹介しその真価を発表すべき絶好の機会として音楽愛好者一同は既に氏の歓迎会の打合わせまで開催。(1922年6月27日『沖縄タイムス』)(下線部筆者)

田辺は中央から初めて訪れる音楽研究者として沖縄音楽を調査研究し、その成果を中央で紹介することを沖縄側から期待されていた。

1922年4月9日、田辺の歓迎・音楽研究会の打合わせ会が沖縄タイムス本社で実施された。出席者は金城義昌、宮良長包、饒平名高德、備瀬知範、具志川、末吉らであった。1922年4月4日『沖縄タイムス』に5人以外の出席予定者として、山内盛彬、尚琳男爵、師範高女・両校の音楽教師(宮良長包)の名前が挙げられている。だが、実際に出席したかどうかは不明である。

1922年4月11日『沖縄タイムス』によると、打合わせ会では、「斯んな好機会容易に得難いから音楽家は勿論一般同好者は氏の調査に出来る限りの便利を与えることに意見一致」した。「到着□共に棧橋□出迎へて当夜は本県料理屋に於て歓迎会を開き席上琉球音楽□辻町舞妓の芸に堪能なる者を踊らし 第2日目は昼から静かな場所に於て音楽の研究的演奏会を開き夜は観劇会を催すこと」を協議した。田辺の滞在期間に琉球舞踊、琉球古典音楽、演劇を披露する機会を設ける計画である。しかし、田辺は船便の調整がつかず、八重山調査を諦め、台湾から4月26日に帰京した。

1922年5月9日『沖縄タイムス』には金城義昌に宛てて、帰京した理由と沖縄調査再実施を記した田辺の手紙が掲載された。

琉球は台湾の帰途に一寸寄る位では却って宜しからずと考え改めて7月に琉球のみへゆると参り度鹿兒島より那覇へ参り3、4日滞在次で八重山へ参り汽船が再び再び基隆より引返す迄八重山へ滞留致度□方がより研究出来る事と存候今回は却って御騒がせ致し失礼仕り候7月には何卒宜敷御願申上候先□御託迄早々。(1922年5月9日『沖縄タイムス』)(下線部筆者)

当初は八重山諸島のみを調査を予定していたが、7月に沖縄本島、八重山諸島を訪問する長期間の調査日程を計画した。4月26日に帰京した時点では、5月以降、他地域の調査を控えていたため、八重山調査の再実施を考えていなかったと思われる。では、なぜ田辺は実施に踏切ったのであろうか。その要因について、3.3で考察する。

3.3 田辺が沖縄調査の再実施(1922年7月)を決めた理由

沖縄調査を再実施するに至った要因は、以下の2点に分けられる。

第1点目は、沖縄出身者たちから調査の再実施に関する多くの問合せがあったことが挙げられる。

田辺は「私の渡航が延期になったので、諸君から問合せ状が来るし」(田辺1922a年9月:37)と述べてい

る。氏名の記載はないが、1922年4月9日に打合わせ会に出席した者の中にも、問い合わせ文書を送った人物がいたと思われる。さらに「甚だ残念ではあったが後日を期して東京へ帰って了った、それと聞いて八重山の方でも大変不平を云って寄越し、折角準備を整えて居たのに研究に来て呉れぬ」(田辺 1922n 年 11 月:71)と記している。この背景には「柳田国男氏から書簡を以て八重山節の研究者喜舎場氏並に岩崎測候所長宛に出来得る限り田辺氏口便宜を与へて下れるやう懇篤する依頼状が来て居る」(1922年4月7日『沖縄タイムス』)ことが挙げられる。柳田から八重山の喜舎場、岩崎宛てに田辺の調査協力依頼があったことを受け、現地では準備に力を注いでいた。それが急に中止になり、田辺に直接苦情を訴えたことは想像に難くない。中央からの研究者来島は1922年当時、歴史的な事件に匹敵する出来事だったのである。

第2点目として、喜舎場が5月に東京の田辺の自宅を訪問し、調査を懇願したことが挙げられる。田辺はこの件について次のように語っている。

此の年(筆者注:1922)の5月に此島の白良小学校長の喜舎場氏が東京へ博覧会見物に来られて、例の三浦環女史の評判の声楽を聞いて後に、私の宅に来られて、『三浦環という人は世界に有名な唄い手というから、何んな美しい声を持って居るかと思ったら、兎ても八重山の農民の女にはかなわない』というて居られた」(田辺 1923d 年 3 月:31-32) (下線部筆者)

一方、喜舎場は次のように語っている。

私(筆者注:喜舎場)が一府六県の学事視察のため上京したおり、東洋音楽の権威といわれた田辺尚雄先生宅を訪れ、「八重山民謡の、芸術的価値を知るために、ぜひ八重山にご来島ください。」と懇願したところ、先生は快くご受諾され、夏季休暇を利用して遥々八重山へ足を運んでくださったことがあった。(喜舎場 1970:2) (下線部筆者)

石垣島白良小学校の訓導兼校長を務めていた喜舎場は、1922年4月、他府県学事視察のため東京に滞在していた(喜舎場 1977:403-404)。宮良の日記によると、東京到着は4月15日であった(宮良 1984:325)。4月17日、喜舎場は岩崎と共に柳田宅を訪問し、1924年に郷土研究社から出版する『八重山島民謡誌』の原稿を提出した⁵⁾。

「東京へ博覧会見物」とは1922年3年10月から7月

31日まで、東京上野公園で開催された「平和記念東京博覧会」を指す。三浦環(1884~1946)はオペラ「蝶々夫人」の主役を務め、欧米で活躍したオペラ歌手である。三浦は1922年4月30日に欧米から8年振りに帰国した。三浦の自伝には「私が東京へ帰って来たとき、ちょうど上野公園で平和博覧会が開かれていましたが、総裁の渋谷栄一子爵にたのまれて博覧会で独唱会をいたしました。“お蝶夫人”の“ある晴れた日”をうたったことは申し上げるまでもなく、そのほかに端唄の“茄子とかぼちゃ”だの俗謡“きんにやもにや”をうたいましたところ、非常なセンセーションを起こしました」(角川書店編集部編 1961:461)とある。当時の新聞記事によると、6月14日~18日まで、平和博・演芸館で三浦の独唱会が開催されている⁶⁾。

しかし、喜舎場が田辺の自宅を訪問したのは5月1日である⁷⁾。宮良の日記には「5月3日(水)喜舎場様は午後8時半の東京駅発の汽車で南下される」とあるため、喜舎場の東京滞在は4月15日~5月3日だと推測される。よって、6月14日~18日に開催された三浦の独唱会を聴いたとは考えにくい。実際に聴いてはいないが、八重山の農民の歌の優秀さを誇張するために、当時一世を風靡していた三浦と比較して、八重山調査を懇願したとも考えられる。あるいは、生演奏ではなく、三浦のレコードを聴いた可能性もある。

いずれにしても、沖縄側は手紙の送付、自宅を訪問して直訴するなど、なり振り構わぬ方法で、八重山調査の再実施を熱望した。そして、その熱意と行動が田辺の心を動かし、沖縄調査が実現するのである。

3.4 沖縄側の準備過程(2)【1922年6月~7月】

3.4.1 田辺の歓迎打合わせ会

田辺から金城宛てに7月の沖縄調査に関する手紙が届く。沖縄タイムス社は「愈々7月20日東京を出発して来県する旨金城義昌氏宛てに一昨日手紙が来た、尚ほ氏は八重山に赴く希望がある」(1922年6月27日『沖縄タイムス』)と、再実施決定の第一報を掲載した。

通知を受け、1922年7月16日、沖縄タイムス本社で歓迎打合わせ会を実施した。出席者は城間恒有、伊差川世瑞、高橋一二三、金城義昌、安元詠勵、山城正忠、伊差川開榮、饒平名光徳、備瀬知範、小嶺幸栄、上間正雄であった。1922年7月19日『沖縄タイムス』によると、調査日程は「第1日(到着の日)午前休憩 午後市内見物。第2日 研究会(午前10時より)午後7時から観劇会。第3日 研究会。第4日 講演会」と決められた。同記事には「『八重山より名人を2、3名なる可く出覇して貰う』という意見出た」「女学校の音楽教

師高橋氏が八重山に出張するので同氏は進んで此の交渉を引受け」とある。つまり、八重山諸島の歌手、演奏家に那覇へ来てもらうよう交渉を進めていた。だが、結果的に那覇への派遣は実現しなかった。

また、田辺文庫には、以下のメモが残されている。なお、【田辺 265-7】とは図書館の請求記号を指す。

資料 1 【田辺 265-7】「田辺来訪時メモ：大正 11 年」注記「26 日、一日、午前」

26 日 一日、午前、予定 午後、市中 晩、招待会
27 日 二日、午前、尚家 午後、尚琳家 晩、歓迎会
28 日 三日、午前、那覇ノ演奏 午後、講演会 晩、観劇会
29 日 四日、午前、地方 午後、市中 晩、招待会

上記の記入者は不明であるが、沖縄で準備に携わった者の記録であろう。1922 年 7 月 19 日『沖縄タイムス』の調査日程と比較すると、メモには 26 日「晩、招待会」、29 日「晩、招待会」が追加され、27 日は「午前、尚家 午後、尚琳家」と、より具体的な調査地が設定された。28 日は「午前、那覇ノ演奏 午後、講演会」と、演奏会や田辺の講演会を盛り込む工夫がなされている。日程も 26 日～29 日と細かく記していることから、メモは 7 月 16 日の打合わせ会以後の記録だと推察できる。

3.4.2 山内盛彬による準備過程

(1) 音楽ジャンルの提案

山内盛彬は 1915 年、東洋音楽学校（東京音楽大学の前身）在学中から長きに亘って田辺に師事⁸⁾してきた沖縄音楽研究のパイオニアである。山内と金城は事前に沖縄県から田辺の説明役として任命されていた⁹⁾。

山内は田辺に披露すべき沖縄音楽について、『沖縄タイムス』紙上で次のように提案した。

之迄の外来者に本県の歌舞音曲を紹介するには、古典的な高尚な物ばかりを出演して居ます。それは本県の体面上さもある可き事であります。処が之は一部の紹介にしかありません。先生は面白半分に見られるのではなく、又は批判的態度のみでもなく、矢張り民衆楽樹立の爲め研究的立場で観察なさるのであるから、博く深く悉く紹介した方がよくはないかと思います。

（山内 1922b 年 4 月 30 日）（下線部筆者）

「博く深く悉く紹介」という言葉を用い、沖縄音楽

の幅広いジャンルから厳選した曲目をじっくり聴いてもらいたいという意向が示された。山内は続けて、下記のような提案もした。

そうなる舞踊口専門家の技は勿論、芸者物もお目にかかる必要があるし、劇も各種演じ、音楽も古典専門家は勿論早節の二三種は交ぜて演奏したらどんなものかと思ひます。出来得べくば路次楽御座楽ウスダイコシノゴ(有るとしたら)アヤゴ等も演じたいし、尚家に秘蔵されて居る古楽の楽器も此際見たいのであります。演奏の曲目選定も在来とは多少趣きを異にし、古曲中昔節端節の代表物、各曲、想緩急を異にせる節、通俗的にも楽理的にも音階を異にせる節を奏したいと思ひます。楽器も各種多数で合奏し、地も交唱独唱取り交ぜたいのであります。（山内 1922b 年 4 月 30 日）（下線部筆者）

古典音楽のみならず民謡の早弾き曲（上記では早節）も含めた選曲を勧めている。さらに、中国伝来の路次楽と御座楽、民俗芸能のウスデーク、アヤグ（嘉手納町、旧玉城村）なども候補のジャンルに挙げた。山内は「大正元年からの数年は、沖縄の各地を飛び回って古曲を習った。それは王朝の路次楽、久米の聖朝楽、クエーナ、内花鼓（ターファークー）、京太郎（チョンダラー）、白太鼓（ウスデーク）など、王朝礼楽のほかには民俗楽、祭祀楽まで約 13 種にのぼる」（山内 1980 年 10 月 17 日）ことを調査した。上記の提案は、その研究成果を反映している。

古典音楽、民謡の早弾き曲、路次楽、御座楽は実際に田辺に披露することが実現した音楽である。そして、尚家秘蔵の古楽器を見たいという山内の願いは、1922 年 7 月 27 日の調査に同行することで叶えられた。

(2) 演奏曲目の提案

山内は 1922 年 5 月、演奏曲目の提案書を沖縄タイムス社に送ってきた。

一、曲目

○印は是非演奏し度い 他は変更するも好い

○一、カチャデ風節（本調子）

一、恩納節（本調子）

一、中城ハンタ前節（本調子）

一、源河節（平敷節）（本調子）

○一、辺野喜節（本調子）

○一、仲渠節（本調子）

- 一、チルレン節（本調子）
- 一、チャンナ節
- 一、首里節
- ◎一、仲節
- ◎一、十七八節
 - 一、天川節
 - 一、長伊平屋節
- 一、干瀬節
- 一、子持節
- 一、散山節
 - 一、坂原口説
 - 一、世栄節
 - 一、大願口説
 - 一、揚口説
- 一、コテイ節（二絃揚調子）
 - 一、早作田節（二絃揚調子）
 - 一、大兼久節（二絃揚調子）
 - 一、仲順節（二絃揚調子）
- ◎一、芋之葉（二絃揚調子）

（山内 1922c 年 5 月（日不明））（下線部筆者）

下線部 12 曲は 1922 年 7 月 27 日首里における演奏会、辻の末広亭での歓迎会で実際に演奏された曲目である。

(3) 山内盛彬が準備したと思われるメモ

田辺文庫には、山内が準備したと思われる下記のメモが所蔵されている。

資料 2 【田辺 265-8】「田辺来訪時メモ：大正 11 年」注記「大正 11 年訪沖の際のもの」

- 一、那覇ニアル 組踊集、工工四類、琉球歌集 節組類ヲ準備シテオクコト、
- 但し 特別書類ハ自参シマシタ（山内）、
- 一、御土産の件
- 一、組踊ノ題（劇場ヘノ交渉）
- 一、尚家ノ古楽器調査
- 一、先生ノ性格趣味トシテ俳優芸者ノ踊ヨリモ 地方ノ盆踊 曰ダイコヲ好カレルガ コノ準備如何、
- 一、首里音楽家ノ出場、

山内が田辺の来沖に備えて、沖縄側の準備会の人々に提案するためのメモだと思われる。「尚家ノ古楽器調査」「首里音楽家ノ出場」は田辺の記録などから実現したことが判明している。山内の意図に反して「俳優芸者ノ踊」は実現したが、「地方ノ盆踊 曰ダイコ」を披

露することは叶わなかった。自ら持参した「特別書類」とは山内の研究調査に依る「琉球音楽の音階比較表」「琉球音楽系統」（田辺 1923e:38-39）だと推測される。

4. 沖縄音楽調査の実際

本節では、4.1 で田辺の沖縄調査の目的について、4.2 で沖縄調査の行程について整理する。

4.1 沖縄音楽調査の目的

田辺は沖縄調査の目的を次のように述べている。

先生は『予は琉球音楽の保存の価値があるや否やの鑑定に来たのであって、詳しい調査は他日技師を使う考である。吾人は恰も参謀本部の仕事をする様なもので、他の人に任す可きだ』と言われた。（山内 1922e 年 10 月:77）（下線部筆者）

今度の琉球音楽の調査は□□系統其の他を調べ度いと思つて簡単な吹込みをして貰つた後技師を遣つて完全にしようと思つたのです。（1922 年 7 月 27 日『沖縄タイムス』）（下線部筆者）

田辺は沖縄音楽に保存の価値があるかどうかを判断するために調査を実施した。個々の音楽は技師を派遣して録音した後、レコードとして完成させたいという意向が伺える。つまり、最初から専門的に深く掘り下げを目的としておらず、その後の研究は他の研究者に委任したいという、やや受け身の姿勢で調査に臨んでいる。

琉球における歴史的の研究と八重山における世界的民謡を調べる、この 2 つの目的を以て旅行をしたのである。（田辺 1922d 年 9 月 24 日『東京日々新聞』）（下線部筆者）

田辺が「八重山における世界的民謡を調べる」という目的に至った要因として、八重山民謡について「柳田国男君が嘗て口を極めて賞讃された」（田辺 1923d 年 3 月:34）ことが挙げられる。3.1.2 で八重山研究を勧める柳田について述べたが、八重山民謡が「世界的民謡」に匹敵することを確認すべく実施された調査だといえる。そして、八重山調査は柳田の人的ネットワークを中心に、喜舎場、岩崎らが全面的に協力して繰り広げられた。

4.2 沖縄音楽調査の行程

田辺の沖縄調査（1922年7月20日～8月13日）の行程は、以下の通りである。音楽・舞踊関連については♪マークを付した。

【1922年7月20日～25日】

東京発の急行列車で出発。岡山駅で大橋道夫（慶応大学生）が同乗、田辺の助手として同行。鹿児島～奄美大島～那覇へ向う。

【1922年7月26日】

那覇港着。山内盛彬、金城義昌、上間正治（沖縄タイムス記者）と沖縄滞在中の日程を作成 →資料1【田辺265-7】

午前11時、沖縄県庁、沖縄県立図書館を訪問。
午後、那覇市中見物。「風月楼」¹⁰⁾で夕食。
午後9時、辻の「梅の屋」で歓迎会。尚琳男爵、第二中学校長・魚住淳吉、護得久朝惟らが参加。♪専属芸妓の琉球舞踊を見る。17曲。

【1922年7月27日】

午前、那覇市首里の尚侯爵家を訪問。尚家所蔵の古楽器を拝見、写真撮影 →資料10【田辺267-1-10】～資料16【田辺267-1-9】

尚琳男爵邸で昼食後♪路次楽を鑑賞 →資料7【田辺147】、資料17【田辺267-1-12】

♪琉球音楽の演奏を鑑賞¹¹⁾。三線、胡弓、琴、笛の合奏。[野村流]（三線）高安朝常、伊江朝薫、大山口篤、（琴）金武良仁。[安富祖流]（三線）豊見山安均、読谷山朝慶、浦添朝題、古堅盛珍、（琴）金武良仁。→資料8【田辺147】

午後8時、辻の「末広亭」で歓迎会。♪琉球音楽の演奏。野村流、安富祖流 ♪琉球舞踊の演舞。芸妓・タマ子 →資料3【田辺265-3】、資料4【田辺265-3】、資料5【田辺265-4】

【1922年7月28日】

午前中、魚住宅で♪琉球音楽調査会。山内、金城、上間、城間恒有、伊差川世瑞、知念績仁、饒平名光徳氏、安元詠嶮が参加。♪各種の節を分類し、歌い方や調子の相違を比較演奏。♪沖縄民謡早弾きの富原盛勇が演奏。♪写声蓄音器に録音 →【録音A】

那覇市高等小学校で講演会。題目「音楽の文化的使命」蓄音機を使用。

「見晴亭」で歓迎会 →資料6【田辺265-11】♪演奏八橋流箏曲：玉城盛重。古舞踊：新垣松含、玉城盛重。

【1922年7月29日】

午前、魚住宅で♪第2次・琉球音楽調査会。
午後、市内で絵はがきを購入。
辻の「新屋」で送別会。♪古典音楽の演奏。芸妓・ツル子による八橋流箏曲「六段」演奏。

【1922年7月30日】

尚琳から蛇皮線、城間から胡弓、伊差川から蛇皮線の爪、饒平名から琉球楽器の調律法・理論表を寄贈される。山内から『琉球の音楽』5巻の原稿、楽譜を貸借。
午後4時、那覇港を出港（八重山丸）。

【1922年7月31日～8月1日】

宮古島～石垣港着。喜舎場永珣、岩崎卓爾が出迎えに来た。石垣島測候所にて、石垣島の舞踊衣装及び楽器の陳列を閲覧 →資料9【田辺265-9】①

午後、島庁で講演。
夕方、岩崎宅で♪音楽演奏会。→資料9【田辺265-9】②～⑩

【1922年8月2日】

午前、石垣島測候所の庭で♪ユンタ、ジラバを中心に音楽演奏会。

♪《ジラバガヌ、ソウソウ、ジラバ》を採譜 →資料54【田辺265-1】 録音→【録音B】

♪《浦船ジラバ》を採譜 →資料59【田辺265-2】

【1922年8月3日～13日】

石垣港～台湾・基隆～門司～東京へ帰る。

5. 「田辺文庫」資料との照合

本節では田辺文庫の資料と田辺の文献記述との照合を行う。なお、資料における下線部は筆者が必要に応じて加えたものである。

5.1 歓迎会、宴会の演奏曲目について

5.1.1 資料3【田辺265-3】「田辺来訪時メモ：大正11年」注記「歓迎余興〔筆者注：大正11年〕廿七日夜、末広亭ニテ」

(1) 1枚目（筆者注：実際の曲名は箇条書き）

1922年7月27日 末広亭にて 歓迎余興

第一回 （音楽）

諸屯節 芋の葉節 ^{しがしくもぶし}東雲節 東細節 踊クフワデサ

第二回 （音楽） 一、仲風、かたい 一、日述懐口

十七八節 本花風節 昔カデク節 干瀬節 述懐 散山節

半紙2枚を二折り、1穴和紙紐綴じの資料である。内容から沖縄側が準備した演目表だと思われる。下線部は田辺による加筆だと推察される。ただし、1922年7月27日末広亭で実際に演奏されたのは「諸屯節。芋の葉節。東細節。踊クハデサ節。十七八節。本花風節。昔カデク節。仲風節（二上り）。述懐節」（田辺 1923b年1月:59）と記している。

(2) 2枚目

舞踊 順序

一、若衆踊（えいのさ、□家 カブキ）コテイ節
二、ニオ踊（元禄風） 上り口説（海道下りノヤキナオシ）

三、花風

サゲダン

下出 述懐（下ん所西洋トルコ歌音階ノ歌）

出 早作田節

四、ムンジュール 出 早作田節

五、花笠踊 恩納節 仲里節

六、万歳

七、黒島節（支那式 マレイ式）

八、四ツ竹踊 クワデーサー

九、谷茶前

十、松竹梅

下線部は田辺による加筆だと推察される。「此の若衆踊やニオ踊を見ると、その服装、踊り方、形から見て全く元禄時代の京阪の若衆歌舞伎である。多分此の若衆歌舞伎が鹿児島から琉球へ伝はったものであろう。そう考えると『上り口説』の踊などは斯の有名な『海道下り』の踊りから模して出て来たものと思われる。花笠踊も全く元禄風の踊である」（田辺 1923b年1月:60）（下線部筆者）との解説と一致している。

5.1.2 資料4【田辺 265-3】「田辺来訪時メモ：大正11年」注記「廿七日夜第一回」

廿七日夜第一回

諸屯節 一、まくら茲べたる夢のつれなさや（宴曲ニ似タリ）。

月や西さがて、冬の夜半

芋の葉 一、芋の露やま玉よか清らさ、

赤糸あぐまきに貫きやりはちやり

東細節 一、東小馬踊わがこなき置ちえん

みやこ、せど踊りわがのとめば（支那式朝鮮式）。

くはでさ節 一、くはでさのお月まどまどと照ゆる

與所目まとはかて忍でいもうれ

1922年7月27日、辻の末広亭で歓迎会の際、「第1部」に演奏された曲名と歌詞が、沖縄タイムス社の原稿用紙裏面に記載された。下線部は田辺が朱色で加筆した箇所であろう。根拠として「諸屯節は一寸宴曲に似て居るような感があった。東細節は他の節とは大に異って支那朝鮮式の所があるように思われた」（田辺 1923b年1月:59-60）との記録が挙げられる。また、諸屯節には「シュドンブシ」と朱筆でふりがなが付された。なお、芋の葉節の歌詞は「一、芋の〔葉の〕露やま玉よか清らさ」（勝連 1999:81）が正しい。

5.1.3 資料5【田辺 265-4】「田辺来訪時メモ：大正11年」注記「廿七日夜第2回」

廿七日夜第二回

十七八節 一、夕雀がふけば 相氣をられらぬ（声明ニ似タリ）

玉黄金使ひの な来ゆらとめば

本花風節 一、三重城に登て 打招く扇

又も廻り来て結ぶご縁

昔カデク節 むいこ花こ花 物も言やぬ許り

露に打向て 笑て咲きゆさ

以下二上り

仲風節 かたりたや 語りたや 月の山のはにかかる
迄も

第三回

述懐節、揮でなつかしや 先づせめてやすが、

別で傍の立たばきやすが

1922年7月27日、辻の末広亭で歓迎会の際、「第2部」に演奏された曲名と歌詞が記載された。下線部は田辺が加筆した箇所だと思われる。理由は「最も私の感じたのは十七八節で、之れを聞いた時に我が仏教の声明と頗る類似した節廻しがあるので驚いて、之を山内氏に聞き質した所、此の十七八節は仏教から来た音楽だとの答えて成る程と思った」（田辺 1923b年1月:60）という記述と一致するからである。曲名と歌詞を記した人物は不明だが、山内である可能性が高い。山内は鑑賞会の様子を次のように述べている。

或曲を演奏する時に嘗つては、先づ第一に音階をきかれた。それは音階を先づ頭に入れて置けば、曲想を捉えるに易いからである。その次にきかれたのが歌詞であった。プログラムなしの宴会の歌ならば、歌い出してから何の歌と聞き分けて、節名と歌詞を書きつけて途中から進呈するのが常であった。琉球音楽の節には色々の異なった歌詞がつけられる習慣がある。人の楽しむ宴会の時も先生は全く研究の態度で殆んどペンを放さなかった。(山内 1922e 年 10 月:74)(下線部筆者)

資料 4、資料 5 を見ると、山内が曲名と歌詞を走り書きした様子が伝わってくる。曲名ごとに筆圧や文字の大きさに差があるため、一気に全曲の歌詞を記録したとは考えにくい。山内の説明にあるように、歌手が歌い出してから歌詞を記録し、その後、それを受け取った田辺が朱色で加筆したと想像される。なお、資料 4、資料 5 の曲名と歌詞は田辺 1927:196-197 にも掲載されている。

5.1.4 資料 6【田辺 265-11】「田辺来訪時メモ:大正 11 年」注記「大正十一年七月廿八日 見晴亭 宴会」

(1) 1 枚目

大正十一年七月廿八日 那覇市「見晴し」亭ニ於テ
実業家連中ノ歓迎小宴ノ全号
番組

(2) 2 枚目

琴 八橋流
演奏者 玉城盛重

- 一、五段 (山谷)
- 一、七段
- 一、源氏節

演奏者は琉球の組踊の名優でありましたが数年前止めて今は再々琴曲の指南をして居る人であります

(3) 3 枚目

古舞踊

一、仲間節 俳優 あらかせうがん 新垣松含

二、諸屯

諸屯歌詞 枕並びたる夢のつれなさゆ
月や西下て冬の夜半

□「枕並べて恋ひしい人と語った夢のつれないことよ、月はもう西に傾いた此の冬の夜半は」

三、シオンガネ節

一ハ出ル時、二、諸屯 三ハ入る時

粉装が髪物ナド間ニ合セデアリマス

本式ハモット高尚ナモノデス 芝居が芝居が解口シタ
ノデロデヤルノデアリマス

(4) 4 枚目 万歳 玉城盛重 (六十才)
上り口 新垣松含

(5) 5 枚目 踊 新垣松含 前の浜 与那原節。

1922 年 7 月 28 日、見晴亭における演奏曲目と解説である。内容から沖縄側が準備したものと推察される。下線部は田辺による加筆であろう。田辺は旅行記 (5) で同内容の解説をしている。「此の玉城盛重氏は実に琉球古今未曾有の名優で我が 9 代市川團十郎に匹敵して居る。その風采容貌までも似て居るのは不思議である。同氏は今は 60 歳に達し、俳優を止めて八橋流の箏の師匠をして居る」(田辺 1923c 年 2 月:17-18)。

5.2 尚家における演奏曲目、楽器について

資料 7～8 で紹介する「琉球音楽雑考」は田辺が調査地で提供されたメモや文字資料をそのままスクラップ帳に貼った記録である。田辺直筆の記録も含まれる。

5.2.1 資料 7【田辺 147】資料名「琉球音楽雑考『第 1 集』」p.1

①【第一】路次楽と御座楽 (大正 11 年) (筆者注:御座楽は略)

「路次楽曲目」大正十一年七月廿七日 首里、尚男爵邸ニ於テ

一段スワイブシ。

註国王ガ正殿ヨリ降り庭ニ座スル時ノ楽

四 三段サンボーヤ

註国王ガ支那ヘ礼拝シタル正殿ヘ帰ル時ノ楽 がく 唶唶二

省 五 二段 ミンダチ。 鼓、銅鑼、鉦

註国王ガ円覚寺行幸ノ時ノ楽 リーハ 唶唶二(ウマブラ)

三 四段 サウシン。

註支那ヘ礼拝ヲ終リタル時ノ楽 銅角二(ウシブラ)

省 二 三段 チチコンコン。

註国王ガ支那ヘ礼拝ノ最中ニ奏スル楽(高嘉良亀)

[路次楽] 楽器

がく 銅角 喇叭 太鼓 小鼓 三葉 笛

同 楽曲名

トークー スワイフシ ニークー メンダ ツ クー サラシン サンボーヤン
頭更 頌王声 二更、明達子 三更、操声、三模様、

ツツコンコン
齋空公

上記は1922年7月27日、尚琳男爵邸にて路次楽を鑑賞する際に、沖縄側から渡された資料だと推測される。下線部は田辺が朱筆した箇所だと思われ、楽器名や演奏者名を追加し、省略された曲名に印を付けている。田辺は「以上の5曲を奏せられる筈であったが、時間の都合で、第2と第5とを省略されたのは頗る遺憾であった」（田辺1922c年11月:44）と述べ、旅行記(3)には実際に演奏された順番（上記の下線部数字）で記した。

5.2.2 資料8【田辺147】『琉球音楽雑考「第1集」』pp.2-5

(1) [第二] 琉球音楽演奏曲目（大正十一年）（筆者注：改行修正）

大正十一年七月廿七日 琉球音楽演奏曲目

（野村）第一回 端節 ○カキヤテ風節。

今日ノホコラシャヤナヲニチヤナタテル、ツボデヲル花ノ露キャタグト

端節 ○恩納節。

先年ニ変テ恩納村ハヅレ 道ハサデ松ノダルキヨラサ 昔節○ ○長伊平屋節。

トリノ伊平屋嶽ヤウキヤガテド見ユル、遊テウキアガユル我が玉黄金

端節 ○中城ハンタ前節

夏ヤ山河ノ流レ水タユデ、オシツレテ互ニスダミブシヤノ

（昔ト端トノ中間） ○コテイ節。

「御慈悲アルユヘド御万人ノマヅリ、上下モ揃テアフギ拜ム

（安富祖流） 第二回 ○作田節 昔節
穂花咲出レバチリヒデモツカヌ 以下二反「シラチャニナビキアブシマクラ

端節 ○早作田節。

大和歌ヌ、東遊に似タリ 銀ウスナカイ黄金ジク立テ 以下二反「タミスリマサル雪ノ真米第四種ノ音階 ○稲マヅン節（昔）

今年毛作ヤアンキョラサユカテ、倉ニ積ミ余チマヅン

シャビラ

○平敷節（端）

源河走川ヤ潮カ湯カ水カ、源河宮童ノオスデドコロ

○辺野喜節（端）

伊集ノ木ノ花ヤアンキョラサ咲イ、我モ伊集ヤトテ真白咲ナ（支那式時調式ナリ）

（野村）第三回 省 ○チャンナ節

昔事ヤスガ今マデモ肝ニ 忘ラヌモノヤアリガ情ケ

省 ○大兼久節 名護ノバン所只今ノハガキ

我ヌ持チタバフリ我無蔵ナガナ

笛一、胡弓二、三絃五、琴一、合奏「○花風（はなふう）節（端）

三重城ニ登テウチ招ク扇子 以下二反「又モ廻リ来テ結ブ御縁

交独唱（安）「○伊野波節

花ヤ吹キスレテ黄葉ニ成ルマデモ、変ルナヨ互ニモトノ心

安、野 共合、 ○金武節

クバヤ金武クバニ竹ヤアフソ竹、ヤニヤシラカキニハリヤ恩納

（安） 第四回 ○茶屋節。

拜テノカリラン首里天キヤナシ、遊テノカレラヌ御茶屋御殿

以下二上り 第五回

○平瀬節 三絃ノミ、（情）

セユミトハテンカスカケテウチヨテ、里ガアケズバニミユスヨスラニ

○散山節（情）

誠カヤ実カ我肝フリタタト、寝ザメオドロキノ夢ノ心地

（安富祖）○仲風節（情）

カタイタヤ、カタイタヤ、月ノ山ノ端ニカカルマデモ ○述懐節（情）

サラバ立チ別ラ興所目ナヒヌウチニ、ヤガテアカツキノ鶏モ鳴ラ

上記は1922年7月27日、尚琳男爵邸で古典音楽を鑑賞する際、沖縄側から渡された資料だと推測される。下線部は田辺が朱筆した箇所だと思われる。

野村流、安富祖流の流派について、昔節、端節、情節など節の種類、「笛1・胡弓2・三絃5・琴1合奏」

など楽器の種類と数、交独唱などの歌唱様式、二上りなどの調弦、「第四種ノ音階」など山内から教わった音階の種類、「大和歌ヌ、東遊に似タリ」と日本音楽と比較した記述がみられる。また、「二反」と2回繰り返す印も付されている。上記の曲名と歌詞は、田辺 1922c 年 11 月:46-48 に掲載されており、執筆する際、上記を基礎資料としたと考えられる。

5.3 八重山調査で現地の人から提供された資料

5.3.1 資料9【田辺 265-9】「田辺来訪時メモ:大正 11 年」注記「八重山の拙き音楽 舜躍の葉を田辺尚雄氏に呈出」

資料 9 は八重山郡教育会から田辺に贈られた「八重山の拙き音楽 舜躍の葉」である。

(1) 大正十一年八月一日 八重山の拙き音楽 舜躍の葉を田辺尚雄氏に呈出 大正十一年八月一日 八重山郡教育会

①志をり 第一 舜衣裳

(字登野城)

筋掛 4 枚。合衣 3 枚。ステナ 2 枚。袖振 1 枚。二才帯 2 筋。若衆帯 2 筋。脚絆 4 組。大名衣(スラー) 2 枚。同袴 2 枚。大鼓(ウード) 1 組。小鼓(ウード) 2 組。烏帽子 2 組。キクロク 1 台。

(字大川)

筋掛 2 枚。若衆衣裳 2 枚。バデン 2 枚。ドジン 2 枚。イタシマ 2 枚。サズ 2 筋。帯 2 筋。脚絆 2 組。陣羽織(ママ) 1 枚。女形付 2 枚。(宮良等整氏蔵)

(字石垣)大和狂装束一式。

(字新川)筋掛 2 枚(石垣長董氏蔵)。

第二、楽器類

サンシン クト クツキヨウ ハンシヨウ タイク
三味線。琴。胡弓。半笙(横笛)。太鼓。キチラク。

ウート クート ウーダイク トラン ションク
大鼓。小鼓。大太鼓。銅鑼。鉦鼓。チキングニ。シ

チデン
タンガニ。鼓。バラック。ブラ。ポウビヤー。

衣裳は田辺 1923d 年 3 月:28-29 に掲載されたものと同じだが、下線部は楽器であるため、「楽器陳列」の項目に掲載している。

②第三、舜躍番組

一、鷺又鳥節。二、^{ザイ}魔踊。三、^{ユチダキ}四ツ竹。四、萬歳。五、
^{カシカキ}総掛。六、^{ハトマクドキ}鳩間口説。七、^{カサブドリ}笠踊。八、島尻天川。九、
山イラパー。

上記は、田辺 1923d 年 3 月:28-29 に「第 3 部(八重山舞踊)」と称して記載された演目である。

③第四、ユンタ。アヨウ。ジラバ。

一、^{ウラフネエ}浦船 ^{フニ キュ ヒ}ジラバ(ビギリア船、今日が日、ウルジン

^{マイ トウ}又前又渡) 二、^{フシ}クナブシ(二ツ星) 三、アルザデヌ、

シユヌマイ。四、^{クン ラ}古見又浦又ブナレマ。五、崎山ユン
タ。 六、ナササマヤー、ジラバ。 七、イグジャー
マ、ジラバ。 八、アカバレジラバ。(以上字登野城)

一、^{フシ}七チ星ユンタ。 二、マヘラチ、ユンタ。三、マ

イチパーユンタ 四、^{メートレエ アミ}宮島又雨チヂ。 五、ジラバ

ガヌ、ソウソウ、ジラバ。 六、^{イニ タニ}稲が種子アヨウ。

(以上石垣村)

④八重山民謡

一、^{アカンマ}赤馬節・^{ウラ パナ}シュラ節(四箇) 二、蔵又花節一大原

越地節(四箇) 三、^{スナイダキ}石又屏風節一祖納嵩節(西表) 四、

^{バシ トリ}鷺又鳥節(四箇) 五、^{チキヤハマ フナクヤー}月夜濱節一船越節(平得) 六、

^{ユナハ}與那覇節(大浜 独唱) 七、^{ミ デタイ}目出度節(宮良) 八、^シ白

^{サブ}保節一^{ツルカミ}ションドスリ節(白保) 九、鶴亀節一橋ユバ節

(川平) 一〇、^{カレヤマ}川良山節(名蔵村 独唱) 一一、

^{アサドーヤ}安里屋節(竹富 独唱) 一二、^{ナカシヂ}仲筋又ヌベマ節(竹富

島 独唱) 一三、山崎又アブゼーマ節(黒島) 一四、

くいぬばな節(新城) 一五、^{ユルアミ}夜雨節(波照間) 一六、

クモウ
小濱節（小浜独唱） 一七、鳩間節（鳩間） 一八、ザン

ザブロー節（高那） 一九、^{クン ラ}古見ヌ浦節（古見 独唱）

二〇 崎山節（崎山） 二一、シオンカネー節（与那国独唱） 二二、トバラーマ節（四箇 独唱）

飛入ユイサユイサ付し、有難節、シピリウラーザ節

第六、八重山女子ノ歌

下線部は田辺執筆の記事、著書に掲載がない記録である。ただし、1922年8月15日「田辺尚雄氏に贈りたる音楽舞踊のしをり」『先島新聞』p.3には掲載されている。

⑤第七、八重山舞躍

舞手：翁長永富、上地マウシ、山里ヒデ、比屋根マウシ、伊波ペーマ、辻野ブナリ、新城マイチ

地歌：小浜用棒、森田永船、宮良信光、大浜当勝、大浜津呂

下線部は田辺の記事、著書に記載がない演奏者だが、八重山民謡界に多大な貢献を果した人物である。1922年8月15日「田辺尚雄氏に贈りたる音楽舞踊のしをり」『先島新聞』p.3には掲載されている。

⑥第八、八重山音楽

三味線：喜舎場孫知 浦添為良、小渡長知、玉代勢秀喜、石垣孫正、

（横笛）通事山戸（胡弓）金城善愛（キチラク）具志当昌（大鼓）山城致宜（琴）崎山用能

飛入り 喜舎場孫正、大浜マカト、豊川マカシ、豊川ミイタ、上地マカト、花城ナベマ

⑦第九、ユンタ、アヨウ、ジラバ、

平田山戸。平田山田真。富永真勢。新城石戸。新城加那。古堅津良。新城蒲戸。（以上）

上記は、田辺 1923d 年 3 月:34 に「第 3 部（八重山舞踊）」と称して掲載された。

⑧《^{ユンタ}七ツ星読歌》（筆者注：歌詞は略）

1922年8月2日に岩崎宅で開催された八重山音楽演奏会で歌われた《七ツ星ユンタ》の歌詞である。

⑨《次良若ノソウソウジラバ》

一 次良若ノソウソウ井の生レヤ

一 宮島ノ^{スバ}神山ノ傍ナカ

一 水ノ^カフキ井ノフキ立テ

一 昼ヤ人々ノ掘り上げ

一 夜ヤ御神ノカシ上げ

一 ^{バキ}湧ナ水ソレキ水出ショウリ

一 八重山島^{フ カ}堀り井ノ始マリ

田辺が採譜・録音した《ジラバガヌ、ソウソウ、ジラバ》の歌詞が掲載されている（5.5.1で後述）

⑩《宮島の雨粒》（筆者注：歌詞は略）

^{イニ タニ}《稲が種子アヨウ》（筆者注：歌詞は略）

田辺 1923d 年 3 月:27-37 に記載された八重山音楽の曲名、楽器、衣装、歌詞は、八重山側から提供されたこの葉に基づいている。なお、①～⑦は 1922 年 8 月 15 日『先島新聞』p.3 に省略なしで掲載された。

5.4 沖縄で撮影した写真／入手した絵ハガキ

田辺文庫には沖縄調査で撮影された写真、購入または寄贈された写真・絵葉書が所蔵されている。5.4 ではそれらの詳細について整理する。

5.4.1 尚家所蔵の古楽器の写真

(1)～(8)は 1922 年 7 月 27 日首里の尚侯爵家を訪問し、尚家所蔵の古楽器や路次楽を拝見した際に撮影された写真である。

(1)資料 10【田辺 267-1-10】「大正 11 年来沖舞踊写真」注記「【琉球】鉦、太鼓（尚侯爵家所蔵）」

写真上部が鉦、下部が太鼓、パチも太鼓の上に置いてある。写真貼付紙に「大正 11 年 7 月、首里ニ於テ大橋道夫氏写」と記され、調査に同行した大橋道夫が撮影した写真だと見られる。資料 10 は「古王家に用いられた式楽用の太鼓及び鉦」（田辺 1923d 年 3 月:巻頭）、「尚家所蔵古楽器」（田辺 1968:288）に掲載された。

(2) 資料 11【田辺 267-1-11】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「【琉球】八橋流箏(尚侯爵家蔵)」

八橋流の箏の写真である。写真貼付紙に「大正 11 年 7 月、首里ニ於テ大橋道夫氏写」との記載があり、大橋が撮影した写真だと見られる。資料 11 は「数百年前の八橋流の箏」(田辺 1923d 年 3 月:巻頭)、「尚家所蔵古楽器」(田辺 1968:288)に掲載された。

(3) 資料 12【田辺 267-1-5】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「【琉球】尚侯爵家所蔵 笛、胡弓、三線、右端ハ真壁作『南風原』」

左より笛、胡弓の弓、胡弓、三線、真壁作の三線「南風原」が写っている。

(4) 資料 13【田辺 267-1-6】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「【琉球】尚侯爵家所蔵：三鉦」

三鉦(ミチンガネ)の右側に鉦を叩くバチ、左側には三板に似ている楽器が写っている。

(5) 資料 14【田辺 267-1-7】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「【琉球】尚侯爵家所蔵：八橋流箏」

八橋流箏と記載があるが、資料 11 と同一の楽器であるかは定かではない。箏の右側に三鉦が写っている。

(6) 資料 15【田辺 267-1-8】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「【琉球】尚侯爵家所蔵楽器」

左より三鉦、三鉦のバチ、拍板、銅鑼、嗶吶(中国の太平簫)が写っている。資料 15 は「琉球首里の尚家に於ける旧王朝時代の楽器」(田辺 1922c 年 11 月:巻頭)、「第 23 図 尚家の古楽器」(田辺 1923f:166)、「尚家所蔵古楽器」(田辺 1968:288)に掲載された。

(7) 資料 16【田辺 267-1-9】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「【琉球】尚侯爵家所蔵楽器」

左より、笛、胡弓の弓、胡弓、三線、真壁作の三線「南風原」が写っている。確認できる楽器は資料 12 と同一だが、「第 23 図 尚家の古楽器」(田辺 1923f:166)、「尚家所蔵古楽器」(田辺 1968:288)に掲載されたのは資料 16 である。

(8) 資料 17【田辺 267-1-12】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「【琉球】旧尚王家、路次楽」

写真貼付紙に「首里、尚琳男爵家庭前ニテ演奏」と記載がある。写真は隊長の金武良仁が銅鑼も持って先頭に立ち、その後ろに 6 人程の演奏家が写っている。

銅鑼、銅角、喇叭を演奏する姿が確認できる。資料 17 は「尚家に於ける路次楽の演奏」(田辺 1922c 年 11 月:巻頭)、「第 25 図 路次楽」(田辺 1923f:172)、「第 5 図 路次楽」(田辺 1968:273)に掲載された。

5.4.2 岩崎卓爾から寄贈された写真

1922 年 8 月 1 日～3 日、八重山調査の案内役・岩崎卓爾から寄贈された写真は以下の通りである。

(1) 資料 18【田辺 267-2-5】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「【琉球】石垣島 舞踊「上り口説」

写真貼付紙に「大正 11 年 7 月 30 日 石垣島測候所長 岩崎卓爾氏就ヨリ寄贈」と但し書きがある。下部に「『美栄地たかはし……』ノ句ニテ将に橋ヲ渡ラントスル姿。石垣島白保村、内原ペーマ女(十八才)、某家米寿祝宴ノ際」との説明がある。資料 18 は「第 9 図 八重山美人の踊(上り口説)」(田辺 1968:304)、「第 34 図 八重山美人の踊『上り口説』」(田辺 1923f:230)に掲載された。

(2) 資料 19【田辺 267-2-3】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「【琉球】八重山舞踊：女躍(笠)(アマカハ節)」

写真貼付紙に「石垣島測候所長 岩崎卓爾氏就職廿五年祝賀会余興」「岩崎卓爾氏ヨリ寄贈」と記載がある。八重山舞踊・天川節を踊った女性を中心に、余興に出演した舞踊家、演奏家の集合写真である。岩崎は 1888 年に石垣島に測候所長として赴任した。就職 25 年目は 1913 年に当るが、撮影年は特定できない。

(3) 資料 20【田辺 267-2-4】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「【琉球】八重山舞踊」

写真貼付紙に「石垣島測候所長 岩崎卓爾氏就職廿五年祝賀会余興」と記載がある。岩崎から寄贈された写真だと思われる。「[上段] 二才躍(摩)ヒャンガン節 [下段] 若衆躍(扇子)バシントリ節 [中段] 若衆躍若衆躍(花)二才躍(扇子)女躍(四ツ竹)二才躍(摩)女躍(団扇)若衆躍(扇子)女躍(天川)女躍(天川)女躍(認め)女躍(笠)女躍 女躍(笠)」と解説がある。この写真も舞踊家、演奏家の集合写真である。

5.4.3 その他の写真

(1) 資料 21【田辺 267-2-1】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「人力車」

那覇劇場(那覇市上之蔵町に 1922 年建立)前で待機

する人力車が写っている。田辺は1922年7月26日に那覇劇場を見学した。資料21は「第21図 那覇劇場」（田辺 1923f:154）、「第1図 那覇劇場」（田辺 1968:262）に掲載された。

(2)資料22【田辺 267-2-2】「大正11年来沖舞踊写真」
注記「人物写真」

写真貼付紙に記された「東洋音楽選書5巻」とは、田辺1968を指す。上部の写真は「第11図 涼々の井戸」（田辺 1968:314）として掲載された。下部の写真は「第31図 宮古島の張水港」（田辺 1968:212）、「第8図 宮古島の張水港」（田辺 1923f:297）に掲載された。

(3)資料23【田辺 267-2-6】「大正11年来沖舞踊写真」
注記「【琉球】石垣島宇新川の棒踊」

写真貼付紙に「第35回石垣島宇新川の棒踊」と追記がある。「東洋音楽選書5巻」と印字してあるが、田辺1968には掲載されていない。掲載候補の写真だった可能性がある。

5.4.4 田辺が購入／現地で提供された絵葉書

(1)資料24【田辺 267-2-7】「大正11年来沖舞踊写真」
注記「【琉球】尾類馬：大正11年4月那覇市制施行祝賀会ノ時ノ行事」

尾類馬（ジュリ馬）とは「沖縄の那覇にあった遊郭、辻において、旧暦1月20日の20日正月に行われた豊年と商売繁盛などを祈願する行事」（古塚 2008:265）である。複数のジュリ（遊女）、三線奏者、警察官、見物客が写っている。資料24～26は「那覇が市になった祝賀の折に市中で各種の踊行列をやった時の写真三四枚…中略…を辛うじて手に入れた」（田辺 1923c 年2月:22）ものに該当すると思われる。資料24は「第29図 那覇市制祝賀当日の踊行列」（田辺 1923f:204）、「第7図 那覇市制祝賀当日の踊行列」（田辺 1968:292）に掲載された。

(2)資料25【田辺 267-2-8】「大正11年来沖舞踊写真」
注記「【琉球】尾類馬：大正11年4月那覇市制施行祝賀会二行ハレタモノ」

資料24と同時期の写真である。先頭のジュリが日の丸の旗を掲げて練り歩く様子が写っている。

(3)資料26【田辺 267-2-9】「大正11年来沖舞踊写真」
注記「【琉球】尾類馬：大正11年4月那覇市制施行祝賀会二行ハレタモノ」

資料24、資料25と同時期の写真である。休憩時なのか扇子を扇ぐジュリ、三線奏者、見物客、警察官が写っている。

(4)資料27【田辺 267-2-13】「大正11年来沖舞踊写真」
注記「【琉球】染屋第一幕アカチラ浜の場：小禄王子（多嘉良朝成）、野村親雲上（新垣松含）」

戯曲「染屋」第一幕（作・上間正雄）の一場面を写した絵葉書である。注記が赤字で印刷されているため、販売用である。多嘉良朝成（1884-1944）は近代沖縄を代表する俳優・民謡歌手、新垣松含（1880-1937）は近代沖縄を代表する舞踊家である。

(5)資料28【田辺 267-2-15】「大正11年来沖舞踊写真」
注記「【琉球】組踊「銘刈子」（天人・儀保松男、銘刈子・新垣松含）」

琉球国時代に玉城朝薫が創作した組踊「銘刈子」の一場面を写した絵葉書である。儀保松男（1901-1932）は近代沖縄を代表する俳優（女形）である。資料28は「〈名優の面かげ〉儀保松男（天人）新垣松含（銘刈子）組踊『銘刈子』」（田辺 1968:288-289）に掲載された。

(6)資料29【田辺 267-2-16】「大正11年来沖舞踊写真」
注記「【琉球】俳優 新垣松含」

新垣松含の女形の姿である。資料29は「〈名優の面かげ〉新垣松含 伊野波節」（田辺 1968:288-289）に掲載された。

(7)資料30【田辺 267-2-17】「大正11年来沖舞踊写真」
注記「【琉球】あまかわぶし：男・親泊興照、女・儀保松男

下部に赤字で「秩父宮殿下台覧舞踊（天川）其二」と印刷された。儀保が「親泊興照とのコンビによる『踊り天川』は大好評で沖縄一の人気俳優と」（日外アソシエーツ編 1998）なったことを示す絵葉書である。資料30は「〈名優の面かげ〉儀保松男（右）親泊興照（左）天川節」（田辺 1968:288-289）に掲載された。伊藤勝一提供『沖縄絵ハガキ・写真集』（沖縄県立図書館所蔵）、同提供『沖縄絵ハガキ2』（同所蔵）でも確認できる。

(8)資料31【田辺 267-2-18】「大正11年来沖舞踊写真」
注記「【琉球】万歳踊（島袋光祐）」

島袋光祐は正しくは島袋光裕（1893-1987）と称し、明治から昭和を通じて沖縄で活躍した俳優・舞踊家である。島袋は二才踊り「高平万歳（万歳踊）」を得意と

しており（日外アソシエーツ編 2004）、それを象徴する絵葉書である。

(9) 資料 32【田辺 267-2-19】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「【琉球】組踊「銘刈子」（俳優・儀保松男）

資料 32 は「〈名優の面かげ〉儀保松男 組踊「銘刈子」（田辺 1968:288-289）に掲載された。

(10) 資料 33【田辺 267-2-20】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「【琉球】千鳥節・儀保松男

資料 33 は「〈名優の面かげ〉儀保松男 千鳥節」（田辺 1968:288-289）に掲載された。『沖縄絵ハガキ・写真集』『沖縄絵ハガキ 2』でも確認できる。

(11) 資料 34【田辺 267-2-21】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「琉球舞踊、花風（儀保松男）」

下部に赤字で「琉球舞踊、花風（儀保松男）」と印刷された。資料 34 は「若衆歌舞伎…花風/那覇劇場俳優：儀保松男」（1922 年 8 月 17 日『東京毎夕新聞』、「第 28 回 琉球俳優の舞踊【花風】（儀保松男）」（田辺 1923f:188）、「〈名優の面かげ〉儀保松男 花風踊」（田辺 1968:288-289）に掲載された。

(12) 資料 35【田辺 267-2-23】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「秩父宮殿下台覧舞踊（天川）其一」

下部に青字で「秩父宮殿下台覧舞踊（天川）其一」と印刷された。儀保松男（女形）の貴重な姿である。資料 35 は『沖縄絵ハガキ・写真集』『沖縄絵ハガキ 2』でも確認できる。

(13) 資料 36【田辺 267-2-24】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「琉球美人：坂本商店発行」

下部に青字で「琉球美人：坂本商店発行」と印刷された。写真貼付紙に「琉球一八橋流箏」と記載があり、かんぷう（琉球の髪を束ねた髪型）を結った女性が箏を弾く姿が写っている。

(14) 資料 37【田辺 267-2-25】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「沖縄美人：那覇真美堂発行」

下部に青字で「沖縄美人：那覇真美堂発行」と印刷された。写真貼付紙に「琉球一尾類馬踊」と記載があり、女性 1 人が尾類馬の衣裳で写っている。

(15) 資料 38【田辺 267-2-26】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「琉球美人：那覇真美堂発行」

下部に青字で「琉球美人：那覇真美堂発行」と印刷

された。写真貼付紙に「琉球一八橋流箏」と記載があるが、資料 34 とは異なる女性が箏の爪をつける姿が写っている。

(16) 資料 39【田辺 267-2-27】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「琉球美人：坂本商店発行」

下部に青字で「琉球美人：坂本商店発行」と印刷された。写真貼付紙に「琉球一八橋流箏」と記載があり、床の間に立て掛けた箏の前に座る女性の姿が写っている。資料 39 は『沖縄絵ハガキ 2』でも確認できる。

(17) 資料 40【田辺 267-2-28】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「沖縄美人：那覇真美堂発行」

下部に青字で「沖縄美人：那覇真美堂発行」と印刷された。写真貼付紙に「琉球一ムンジュール踊」と記載があり、平笠を小道具に舞踊「むんじゅる」を踊る女性が写っている。

(18) 資料 41【田辺 267-2-29】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「琉球舞踊：天川：坂本商店発行」

下部に青字で「琉球舞踊：天川：坂本商店発行（美の十）」と印刷された。写真貼付紙に「琉球一天川踊」とある。柄杓を小道具に舞踊「天川」を踊る女性が写っている。

(19) 資料 42【田辺 267-2-30】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「琉球風俗：尾類馬踊：坂本商店発行」

下部に黒字で「琉球風俗：尾類馬踊：坂本商店発行（美 4）」と印刷され、女性 1 人が尾類馬の衣裳で写っている。

(20) 資料 43【田辺 267-2-31】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「【琉球】天川踊」

左から三線を弾く女性、柄杓を小道具に持つ女性、ヴァイオリンを弾く女性が写っている。

(21) 資料 44【田辺 267-2-32】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「【琉球】尾類馬」

女性 2 人が尾類馬の衣裳で写っている。

(22) 資料 45【田辺 267-2-33】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「【琉球】天川踊」

舞踊「天川」を踊る女性 1 人が写っている。資料 45 は『沖縄絵ハガキ・写真集』、仲宗根源和編 1933『沖縄県人物風景写真帖』（沖縄県立図書館所蔵）でも確認できる。

(23) 資料 46【田辺 267-2-34】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「【琉球】」

天秤を背負った女性 1 人が写っている。

(24) 資料 47【田辺 267-2-35】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「【琉球】辻の音楽」

左から箏を弾く女性、三線を弾く女性、少女、踊り子（少女）、女性が座っている。資料 47 は「第 26 図 辻の音楽と舞踊」（田辺 1923f:182）、「第 3 図 辻の音楽」（田辺 1968:265）に掲載された。

(25) 資料 48【田辺 267-2-36】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「【琉球】《伊野波節》」

編み笠を被った男性舞踊家 2 人が写っている。

(26) 資料 49【田辺 267-2-37】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「【琉球】若衆踊」

編み笠を被り、右手にチーグーシ（杖棒）、腰に刀を差した女性 2 人が写っている。資料 49 は「第 27 図 琉球舞踊 若衆踊」（田辺 1923f:186）、「第 6 図 若衆踊」（田辺 1968:281）に掲載された。

(27) 資料 50【田辺 267-2-38】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「【琉球】天川踊 沖繩舞子」

写真貼付紙に「端道通り 2 階小祿（かまで）」と記載がある。資料 50 は「第 35 図 天川踊」（田辺 1923f:238）、「第 10 図 天川踊」（田辺 1968:309）に掲載された。

(28) 資料 51【田辺 267-2-39】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「【琉球】『万歳』」

編み笠を被り、右手にチーグーシ（杖棒）を持った男性舞踊家 2 人が写っている。

(29) 資料 52【田辺 267-2-40】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「琉球舞子：那覇真美堂発行」

下部に青字で「琉球舞子：那覇真美堂発行」と印刷された。「舞踊『松竹梅』」「右少女：辻遊郭端道通り 2 階小祿（かまで）。真ん中少女：端道口小（うさ小）。左少女：梯梧木小路雲口離（かみ一小）」と記載がある。うさ小、かみ一小とは少女の名前（源氏名／愛称）だと思われる。資料 52 は「天川踊とか花笠踊とか松竹梅などの舞踊写真七八枚…中略…を辛うじて手に入れた」（田辺 1923c 年 2 月:22）ものに該当すると思われる。絵葉書は田辺 1923e に掲載された。

(30) 資料 53【田辺 267-2-41】「大正 11 年来沖舞踊写真」

注記「琉球美人舞妓：坂本商店発行」

下部に青字で「琉球美人舞妓：坂本商店発行」と印刷された。左から、箏を弾く女性、三線を弾く女性、ヴァイオリンを弾く女性、踊り手（女性）が写っている。

5.5 田辺が採譜した楽譜

田辺文庫には沖縄調査で採譜した楽譜が所蔵されている。5.5 では数字譜が五線譜化され、修正を加え雑誌や著書に掲載された経過を整理する。

5.5.1 《ジラバガヌ、ソウソウ、ジラバ》

(1) 資料 54【田辺 265-1】「田辺来訪時メモ：大正 11 年」
注記「ジラバガヌ、ソウソウ、ジラバ」

田辺が 1922 年 8 月 2 日、石垣島測候所で八重山民謡《ジラバガヌ、ソウソウ、ジラバ》を聴き、方眼紙に数字譜で採譜したものである。1 枚目は数字譜に対応する形で歌詞 1 番が記してある。歌詞「♪ジラバガヌ～」を下部、ハヤシ「♪ヒハイ」「♪サユイヤサ」を上部に段差を付けて記譜した。2 枚目も数字譜と歌詞 1 番が記してあるが、歌詞とハヤシを同一線上に記譜している。リズムと音程が異なる 2 種類のメロディーの記譜があり、再考・確認を繰り返した軌跡がみえる。

2 枚目が最初に採譜したもの、1 枚目がそれらを整理したものと読み取れる。

(2) 資料 55：八重山島農民歌「ジラバガヌ ソウソウ ジラバ」田辺尚雄作譜（田辺 1923d 年 3 月）

資料 54 の数字譜を五線譜化した楽譜である。歌詞 1～7 番が記された。大譜表の上段は女、下段は男が担当し、ト音記号、2/4 拍子で表記した。歌詞の音符は「たま」の右側に棒が付いているが、ハヤシの音符は「たま」の左側に棒が付いている。つまり、歌詞とハヤシを書き分けて記譜している。

(3) 資料 56【田辺 268-10】「琉球」注記「次良若ノソウウタ々ジラバ」田辺尚雄作譜

五線譜 1 枚に《次良若ノソウウタ々ジラバ》の楽譜と歌詞 1 番が記された。資料 55 と同様、大譜表の上段は女、下段は男を示し、ト音記号、2/4 拍子で表記した。ただ、歌詞もハヤシも音符は「たま」の右側に棒が付き、統一している。資料 56 は資料 55 の清書版であろう。資料 56 は田辺 1923f にも掲載された。

(4)資料 57:「ジラバガヌ、ソウソウ、ジラバ」(田辺 1932:7)

五線譜に記された《ジラバガヌ、ソウソウ、ジラバ》の楽譜である。大譜表の上段は独唱、下段は合唱と示され、ト音記号、2/4拍子で表記した。資料 55、資料 56 はハ長調だが、資料 57 はト長調で記譜している。歌詞のみの掲載はない。

(5)資料 58【田辺 186】「琉球及八重山音楽」注記「ジラバガヌ、ソウソウ、ジラバ」

田辺 1968:311 に掲載された《ジラバガヌ、ソウソウ、ジラバ》(田辺尚雄:採譜)の原版だと思われる。大譜表の上段は独唱、下段は合唱(ハヤシ)と示され、ト音記号、2/4拍子で表記した。資料 57 と同様、ト長調で記譜している。

5.5.2《浦船ジラバ》

(1)資料 59【田辺 265-2】「田辺来訪時メモ:大正 11 年」注記「浦船ジラバ」

田辺が 1922 年 8 月 2 日、石垣島測候所で八重山民謡《浦船ジラバ》を聴き、方眼紙に数字譜で採譜したものである。上半分は《浦船ジラバ》の数字譜と歌詞 1 番が記された。数字を塗りつぶしたり書き直したりした跡があり、聴きながら採譜を修正していった様子が伺える。歌とハヤシは同一線上に記譜している。

下半分は《浦船ジラバ》の数字譜と歌詞 1 番が 3 段で記された。小節線に 1ヶ所修正の跡があるが、その他の小節線、復縦線、終止線に修正の跡は見当たらない。上半分を清書した数字譜であろう。

(2)資料 60:八重山島農民歌「浦船ジラバ」田辺尚雄作譜(田辺 1923d 年 3 月)

資料 59 の数字譜を五線譜化した楽譜である。歌詞 1 番が記された。大譜表の上段は女、下段は男と示し、ト音記号、2/4拍子、ハ長調で表記した。歌詞の音符は「たま」の右側に棒が付いているが、ハヤシは G・A 以外の音符の左側に棒が付いている。この曲も歌詞とハヤシを書き分けている。

(3)資料 61【田辺 186】「琉球及八重山音楽」注記「浦船ジラバ」

田辺 1968 に掲載した《浦船ジラバ》(田辺尚雄:採譜)の原版だと思われるが、段数に相違がある。資料 61 は 4 段、田辺 1968:312 は 5 段で掲載されている。

大譜表の上段は独唱、下段はハヤシを示し、ト音記号、2/4拍子で表記した。資料 60 と異なり、ト長調

で記譜した。

5.6 田辺が購入したレコード

(1)資料 62~67【田辺 306-310/田辺 325】資料名「大阪蓄音器/ナショナル・レコード」

田辺は調査時に大阪蓄音器株式会社(白熊印ナショナル・レコード)制作の SP レコード 6 枚を購入している。この SP は 1915 年沖縄音楽初の商業目的に制作・販売されたレコードであり、沖縄で現地録音された(高橋 2011 参照)。

田辺は「オリエントでも近頃これを多数吹込んで居て、それを那覇市の森楽器店で売って居る」(田辺 1923c 年 2 月:15)と記した。大阪蓄音器は 1917 年に東洋蓄音器(オリエント・レコード)に併合され、原盤のほとんどをオリエントへ移籍した(岡田 1991 年 8 月:121)。そのため、田辺はナショナルではなく「オリエント」と記したのであろう。

田辺文庫所蔵 SP からレーベル情報を確認したところ、5 枚が「白熊印ナショナル・レコード」、1 枚が「らくだ印オリエント・レコード」のデザインであった。

5.7 田辺が録音した沖縄音楽

田辺は沖縄調査で写声蓄音器による録音を実施した。5.7 ではそれらの詳細と調査後の公開について整理する。

5.7.1 田辺が持参した写声蓄音器に録音

(1)琉球古典音楽・沖縄民謡を録音【録音 A】

1922 年 7 月 28 日、那覇市第二中学校長・魚住淳吉宅で琉球音楽調査会が開催された。古典音楽の演奏家として、城間恒有、伊差川世瑞、知念績仁、饒平名光徳、安元詠蟻が参加した。また、沖縄民謡の演奏家として、富原盛勇が参加した。田辺は古典音楽の「各種の節を分類してその各種の唄い方の相違、調子の区別、其他の音楽上の性質を細かに区分し比較して唄い分けて呉れた。之れは非常な参考となった」(田辺 1923c 年 2 月:12)と述べた。さらに、「琉球の楽典と称する譜本の『工工四』を前に置いて、細かく一音毎の楽譜を見ながら聞いて居たので、調子の具合などもよく判った」(田辺 1923c 年 2 月:14-15)と回想している。

田辺は東京から持参した写声蓄音器で録音することを試みた。録音曲目は、城間恒有《揚作田節》、伊差川世瑞《干瀬節》、富原盛勇《宮古ン子》《テマド節》である。「私は持参した写声蓄音器を取出して、之等の音楽家に次の 3 曲を吹込んでもらった。此の吹込器械は此の春に台湾の蕃地へ持って行ったものと同一の品で

あるが、なにしろ気温が余り高過ぎて、蠟盤が極度に軟かくなって居たものであるから、その吹込成績は非常に悪かったのは残念であった」（田辺 1923c 年 2 月 :36）（下線部筆者）と述べている。台湾、沖縄調査で使用した写声蓄音器の写真は、LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』（TW-80011、東芝 EMI、1978）解説 p.2 で確認できる。写声蓄音器の実物は現在、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターに所蔵されている。

5.7.2 岩崎卓爾の写声蓄音器を借りて録音

(1) 八重山民謡を録音【録音 B】

1922 年 8 月 2 日、田辺は石垣島測候所で岩崎卓爾所蔵の写声蓄音器を貸借し、八重山民謡《ジラバガヌ、ソウソウ、ジラバ》を録音した。「岩崎氏へは前に柳田国男氏から写声蓄音器を 1 台送ってあったのである。然し何しろ 100 度以上の高温が続くので、蠟の成分の一部が蒸発したと見えて、ボロ々々になってしまっよく吹込めなかったのは残念であった」（田辺 1923c 年 2 月 :36）（下線部筆者）と述べている。つまり、柳田から送られた写声蓄音器を使用し、八重山民謡を録音した。田辺が持参した蓄音器を使用しなかった要因として、那覇における録音結果が極めて悪かったことが挙げられる。

2012 年岩手県遠野市立博物館で開かれた展覧会「柳田国男の生涯」では、柳田が「遠野物語の話者、佐々木喜善に贈った蓄音機用写音機」（2012 年 6 月 13 日『朝日新聞』:28）が展示された。当時音声をレコード盤に録音する機器を「蓄音機用写音機」「写声蓄音器」「音声蓄音機」などと呼び、呼称は定まっていなかった。また、「1922 年の『佐々木喜善日記』によれば、3 月 10 日に届き、4 月 11 日には吹き込みに成功したとある」（2013『特別展図録 柳田国男の生涯』:37）。つまり、柳田は 1922 年に岩手県の佐々木と八重山の岩崎へ、写声蓄音器を送っていたことになる。

1922 年という同時期に民俗学調査、民謡調査において写声蓄音器を録音機材として使用したことは特筆に値する。なお、大藤・柳田編 1981:34 では、柳田が佐々木に贈った蓄音機用写音機の写真が確認できる。

5.7.3 録音音源の公開

(1) 1923 年「啓明会 第 8 回講演」にて公開

田辺は 1922 年 11 月 4 日「啓明会第 8 回講演会 台湾及琉球の音楽に就きて」（於：日本工業倶楽部）の場で、沖縄調査で録音した音源を公開した。講演会を記録した田辺 1923e:40 には、下記のように紹介されている。

「演奏及写真事項」（一）蓄音器演奏

(イ) 生蕃吹込音楽 数曲

(ロ) 琉球沖縄音楽 数曲

(ハ) 八重山群島音楽 1 曲

「(ロ) 琉球沖縄音楽 数曲」とは、1922 年 7 月 28 日録音の《揚作田節》城間恒有、《干瀬節》伊差川世瑞、《宮古ン子》《テマド節》富原盛勇を指すと推察される。「(ハ) 八重山群島音楽 1 曲」とは、1922 年 8 月 2 日録音の《ジラバガヌ、ソウソウ、ジラバ》を指すと思われる。講演会において、琉球音楽の生演奏を「琉球音楽実演」と称し、蓄音器による音源再生を「蓄音器演奏」と紹介した。

(2) 東洋音楽学会「第 240 回定例研究会」で音源を公開

1977 年、東洋音楽学会「第 240 回定例研究会」で台湾・沖縄調査の録音音源が公開された。発表者は田辺秀雄（尚雄の長男）、発表題目は「田辺尚雄大正 11 年樺太、台湾高砂族、琉球、昭和 7 年南洋現地音楽調査録音盤及び録音器について」であった。「この例会では、それらの録音盤中、台湾高砂族、琉球八重山の民謡ジラバ、それに南洋の音楽など 3、4 曲をカセット・テープにとって演奏し、器械をスライドで示した」（田辺秀雄 1978:160-161）。

この時公開した「琉球八重山の民謡ジラバ」とは、1922 年 8 月 2 日録音の《ジラバガヌ、ソウソウ、ジラバ》だと推察される。

(3) LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』発売

1978 年 LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』が東芝 EMI から発売された。田辺が 1922 年～1935 年に台湾、南洋、樺太、沖縄を調査した際に録音した音源をレコード化したものである。尚雄が録音・調査した音源を元に、秀雄が企画・監修した。LP には沖縄・石垣島で 1922 年に録音された《ジラバガヌ・ソウ・ソウ・ジラバ》（ママ）（1' 58"）が「8. 八重山民俗音楽」として収録されている。現存する最も古い沖縄音楽の現地録音であろう。

録音を聴くと、1 番は歌詞を男声、ハヤシを女声（複数）が担当し、2 番は歌詞を女声、ハヤシを男声が担当している。歌詞とハヤシを男女が 1 コーラスごと交替して歌っていることがわかる。

田辺は「この歌に重なって歌われる重音の美しい囃し詞が、ラッパ吹込みのため後方に居たために、声が録音器に達せず、美しい和音が録音出来なかった」（LP

解説 p. 2) (下線部筆者) と述べた。確かにハヤシの音量が弱く、複数ではなく、1人で歌っているように聴こえる。雑音が多く、録音状態は良くないものの、男女共、甲高い透る歌声が記録されている。

6. 田辺尚雄による沖縄音楽の評価

田辺は沖縄調査の記録の中で、音楽や舞踊について批評や感想を述べている。本節では特に記述の多かった琉球舞踊、琉球古典音楽・沖縄民謡、八橋流箏曲、八重山民謡に分けて、それらの評価を整理する。

6.1 琉球舞踊に対する評価

田辺は1922年7月28日、見晴亭にて玉城盛重(1868～1945)、新垣松含による下記の琉球舞踊を鑑賞した。

第2部 古舞踊。

- | | |
|-----------------------------|-----------|
| (1) 仲間節。諸屯節。シヨンガネ節。俳優 新垣松含氏 | |
| (2) 万歳。 | 前俳優 玉城盛重氏 |
| (3) 上り口説。 | 新垣松含氏 |
| (4) 前の浜。 | 同氏 |
| (5) 与那原節。 | 同氏 |

(田辺 1923c 年 2 月:17)

田辺は「玉城盛重氏は実に琉球古今未曾有の名優で我が9代市川團十郎に匹敵して居る。その風采容貌までも似て居るのは不思議である…中略…氏の万歳を見て実はその神技に打たれ涙が出て来た…中略…名優の芸術というものの偉大なる力を今更の如くに感嘆した」(田辺 1923c 年 2 月:17-18)と述べている。この時、既に玉城は64歳を数え、俳優・舞踊家としての第一線から退いていた。それゆえ「玉城氏が死んでは斯の如き妙技が永久に絶滅することを思ふと悲しくなる。何とか保存の道を講じなければならぬ」(田辺 1923c 年 2 月:18)と、記したのである。

田辺は「日本の古演劇と玉楠(筆者注:正しくは玉城)の優れた芸風を紹介するため是非一度東京の帝劇あたりへ連れて来て見たいと思って居る」(1922年8月17日『東京毎夕新聞』)と、紙面を通じて希望を述べた。玉城は田辺の希望通り、1936年日本民俗協会主催「琉球古典芸能大会」(於:日本青年館)で組踊『二童敵討』に出演し、俳優・舞踊家としての力量を東京で披露している。

また、新垣について「若手の俳優で中々舞踊は上手である。到底舞妓の比ではない。諸屯の踊などは実に繊巧なる曲線の運動美を尽して居る。それに非常に容貌が美しい。第一流の俳優たる資格を備へて居る」(田

辺 1923c 年 2 月:18)と、高く評価した。新垣の舞踊姿を写した資料 27～29 は田辺 1968 に掲載され、調査時の評価が反映されている。

6.2 琉球古典音楽・沖縄民謡に対する評価

1922年7月28日、魚住宅で琉球音楽調査会が開催され、城間、伊差川、知念、饒平名、安元が参加した。御前風、昔節、大古節、中節、端節、山原本部今帰仁ノ節、久米島節、八重山節に該当する曲目が演奏された(田辺 1923c 年 2 月:13-14)。田辺は次のような感想を述べている。

御前風の曲は実に立派で、実に何とも言えぬ上品な味いがある。昔節や大古節も亦中々よい。之等を聞く時には涙がこぼれる程の感がする。端節となるとズット曲が軽くなって来る。上品な所がない然しそれでも又中々面白い味を持って居るものも可なりある。(田辺 1923c 年 2 月:14)

また、田辺は沖縄本島を中心に歌い継がれた沖縄民謡を聴き、次のように述べた。

午後になって早弾きをやる富原盛勇氏が来た。この人の蛇皮線の弾き方は草弾と違って全く他の音楽者とは別である。つまり曲弾きとでもいうようなもの…中略…富原氏の調子の具合は正確で、弾き方も非常に巧みであった。此の人が一二曲弾いて聞かせて呉れたが、私は余り之を面白いと思わなかった。私は初めに聞いた御前風や昔節の方が堂々として実に立派なものであると感じた。(田辺 1923c 年 2 月:15)

富原盛勇(1875-1930)は独特の三線奏法で民謡を歌いこなし「富原ナークニー」と称される人物であった。「早弾き」と呼ばれる「装飾音を多用する三線奏法は、それまでの琉球古典音楽にはみられない奏法であった」(高橋 2011:232)。それゆえ、琉球音楽調査会の席に、早弾きの名手である富原を招いたのである。3.4.2(1)で述べたように、この試みは山内の主導により行われたと推察される。だが、田辺は富原の早弾きについて、調弦や音程の正確さ、三線奏法の技術的な高さを認めつつも、面白さを感じていない。早弾きにはあまり興味を持たず、古典音楽の御前風や昔節により重厚さを感じていた。

6.3 八橋流箏曲に対する評価

田辺は1922年7月27日、尚侯爵家における古楽器

閲覧時に八橋流の箏を発見し、大いに驚きを示していた。さらに、1922年7月28日、見晴亭にて玉城盛重による八橋流箏曲「五段（山谷）」「七段」「源氏節」を鑑賞した（田辺 1923c 年 2月:17）。また、1922年7月29日、八橋流箏曲の演奏に優れた芸妓・ツル子を新屋に呼寄せ、「六段曲」等を鑑賞した。田辺は八橋流箏曲について、下記の感想を述べている。

沖縄では八橋流の箏曲が大に行われて居る。生田流や山田流は行われて居ない。箏の形や爪の形も全く昔の八橋流の儘である。それで調子の合せ方が八橋時代のやり方であって今の生田流や山田流とは違う。それで八橋当時の曲が沢山残って居る。例えば「一段」、「二段」、「三段」、「五段」、「六段」、「八段」、「九段」、「源氏節」などがあり、「六段曲」も八橋当時のやり方であって、今の生田流や山田流の「六段曲」とは大体は同じであるが、調子の合せ方や、少しの指遣いが違うから古風で面白い。（田辺 1923a 年 1月:90）（下線部筆者）

内地に滅びたものが琉球に残って居るという点に於て非常に音楽史上貴重なる材料であると言わなければならぬ。（田辺 1923c 年 2月:17）（下線部筆者）

古代琴曲の八ツ橋の研究をするには是非沖縄へ行くべきである。（1922年8月17日『東京毎夕新聞』）

日本本土で衰退した八橋流の箏曲が、沖縄で演奏され続けている事実に感嘆した様子が伝わってくる。そして、古い八橋流の箏曲の研究をするためには、沖縄に行くべきだと強調した。

戦後の沖縄音楽研究、とりわけ音階の研究においては、沖縄に日本本土の古層を求める姿勢が強く表れていた（小島 1981、小泉 1983、小泉 1986 参照）。八橋流箏曲が残る沖縄に日本本土の古い姿、原型を発見した田辺の指摘は、戦後の沖縄音楽研究に多大な影響を与えている。

6.4 八重山民謡に対する評価

1922年8月1日、岩崎宅にて八重山民謡、舞踊の発表会が行われた。田辺は《鷺の鳥節》《白保節》《黒島節》《鳩間節》《夜雨節》《小浜節》《与那国シヨンカネ一節》《でんさ一節》等を聴き、次のように批評している。

先ず第1に節回しの具合が実に思い切って大胆であって、少しも技巧を凝らした所がないようで然も頗る技

巧的であるのみならず、余程進歩したものであります…中略…バジヌツル節鳩間節デンサ節などは、実に日本に於ける第一流の民謡として、到底他には斯の如く進歩したものはなかろうと思います。単にそれのみでなく謡の文句が大体に於て非常に上品である、殊にデンサ節の如きは最も教育的な文句で、総て人間の行を戒めるような、訓戒的の筋になって居る、又其外男女関係を謡ったものでも其唄い方が非常に綺麗である。（田辺 1922n 年 11月:74-75）（下線部筆者）

八重山諸島には伝承された古謡を士族や役人が三線伴奏にのせて歌った歴史がある。それらの曲目を「節歌」と総称し、大衆も歌い継ぐようになる。田辺が上記で挙げた3曲も節歌に該当する（波照間 1983:364 参照）。田辺は大胆にコブシを回す歌唱法とテクニックを評価し、日本第一流の民謡というお墨付きを与えた。歌詞の上品さを指摘し、八重山諸島の代表的な教訓歌《でんさ一節》の歌詞に関心を示す。男女の恋愛を歌った節歌においても、美しく整った歌唱法だと評価している。また、下記のような感想も述べていた。

之等の歌謡は琉球の歌謡の陰気なのに比較して、非常に活発で陽気で面白い。殊に此の中で『鷺又鳥節』と『鳩間節』とが最も面白く感じた。之等はその儘之れを日本全国へ流行させたいと思った位である。或いは之れを小学校の音楽材料に用いてもよいとさえ思った。（田辺 1923d 年 3月:34）（下線部筆者）

琉球古典音楽と比較し、八重山民謡の活発さ、陽気さを強く感じている。そして、八重山という一地方の民謡を全国的な民謡へと流行させたいと思うほど、興味を強く抱いていた。さらに、小学校の音楽科（当時の唱歌科）教育における教材としての可能性も示唆している。上記の文面から、田辺が受けたインパクトの強さが如実に伝わってくる。

ユンタ、ジラバ、アヨウの種類は凡て楽器のない声楽のみで、主として農民が唄い、男女の混声でやるのである。男が唄う中に、切れ目々に女が掛け声を入れる。その掛け声が交錯して屢々二重音となって居る。又反対に女の唄の中に男が掛け声を入れることもある。此の二重音が実に美しい和声をなして居る。実に驚くべき合唱である。男女共その声の美しく精錬されたことは驚くべきもので、女の声は数町の野を通してコルネットの如くに響いて居る。…中略…私は今回の研究旅行中で此のユンタ、ジラバを得たことは世界的の発

見であると信じて居る。実に私にとって喜びに堪えられない最大の収穫であった。(田辺 1923d年3月:31-32) (下線部筆者)

八重山調査の記録の中で、ユンタ、ジラバ、アヨーに関する記述が極めて多い。上記は一部であるが、男女の交互唱形式を詳細に解説している。例えば、歌詞担当の男声が歌い終わらない前に、ハヤシの女声が歌い始める。すると、男女の歌声が同時に重なり合う箇所が生まれる。このことを田辺は「二重音」「和声をなしている」と捉えた。「漸次調子に乗って来るとコーラスのように聞えて来て、実に宜い感じがする」(田辺 1922n年11月:76)と述べ、ハーモニー(2つ以上の声の調和した響き)を形成する民謡だと認識していた。

また、田辺は次のようにも述べている。

この合唱が全然ヨーロッパの今日の進歩したものにくらべて少しもおとらない、おなじ複音でヨーロッパのいわゆるハーモニーを備えているが、日本にはハーモニーのある歌はない。だからこの歌を聞いていると上野の音楽学校でコーラスをやっているのとおなじこと。それを野良でやっているのだから、世界で百姓がコーラスをやるのはロシアと八重山としかない。即ちこれは世界第一と見てよろしい。(田辺 1922m年10月5日『東京日日新聞』)(下線部筆者)

日本の伝統音楽は基本的にモノフォニー(単旋律の音楽様式)であり、複数で歌う場合もユニゾン(斉唱)である。このことを田辺は「日本にはハーモニーのある歌はない」と解説した。さらに、ハーモニーを備えたユンタ、ジラバ、アヨーを「世界第一の歌」と大いに褒め讃えた。八重山民謡がハーモニーという西洋の音楽様式を兼ね備えているように聴こえたからこそ、「世界的な発見」と認めたのであろう。

また、田辺は歌詞の言語について、次のように記している。

石垣島の民謡は…中略…半分馬來系の発音が這入って居りますが、そう云うものでなくして日本語でやらしたならば、文句丈け変えてやらせれば芸術的の歌であって、何とか之を奨励したいと思つて居ります。(田辺 1923e:37)(下線部筆者)

八重山民謡の歌詞は、八重山方言によるものが大部分を占める。田辺は上記の発言で、歌詞を方言から日本の共通語に改作することを提案している。

共通語による歌詞の改作は、1934年日本コロムビア・レコードが新民謡《安里屋ユンタ》を発売した際に、実践している(高橋 2012、高橋 2015、高橋 2017参照)。日本コロムビア総営業部の来島充隆は、録音前に八重山諸島を訪問し、下記のように述べている。

八重山のユンタ、ジラバガや端唄等には大に気を強くしました…中略…然かし歌詞はその儘では駄目です。歌詞は他県人には丸で分かりませんから折角いロメロデーを持っていてもその歌の気分に入ることは出来ない。これでは商品にはなれない。歌詞をどうにか作り替えてその持ち味を毀はさないでほしいものです。(喜舎場 1934年10月21日)(下線部筆者)

来島が目した古謡《安里屋ユンタ》は八重山方言による歌詞で歌われていた。だが、レコード化にあたり、日本コロムビアは《安里屋ユンタ》のメロディーのみを使用し、新たに共通語の歌詞を星克(1905-1977)に創作させ、レコーディングに臨んだ。上記の田辺の提案は11年後に日本コロムビアにより実現し、その後、《安里屋ユンタ》は沖縄を代表とする歌として全国的に普及したのである。

7 まとめ

これまでの考察によって、以下の4点が結論として述べられる。

7.1 〈外向き〉発信スタイルの起点

沖縄調査は田辺の音楽研究者としての関心及び責務と、中央から来訪した研究者に沖縄音楽を披露する沖縄側の目論みが複雑に絡み合いながら、実施されていた。そして、1922年の田辺の来訪が沖縄音楽界に多大な影響を及ぼし、東京という中央へ音楽を発信する新たな志向が沖縄社会へ導入された。

田辺は1925年、琉球舞踊を織り込んだ舞踊劇「与那国物語」を東京・歌舞伎座で上演するなど、研究成果を多方面に反映させていく。さらに、1928年、日本青年館主催「第3回郷土舞踊と民謡の会」で八重山諸島の民謡・舞踊が現地の人々により上演された。1939年～1948年には日劇ダンシング・チームが沖縄民謡・舞踊を素材とした「琉球レビュー」を上演する。このように沖縄の民謡・舞踊が次々と東京で紹介され、日本の表舞台に登場する契機となったのは、1922年の田辺の来訪である。よって、田辺の沖縄調査は〈外向き〉発信スタイルの起点と位置づけられる。

筆者は沖縄のポピュラー音楽に関する歴史的研究を

ふまえ、〈内向き〉〈外向き〉という2つの発信スタイルを提案してきた（高橋 2003、高橋 2010:6-7 参照）。

〈内向き〉発信スタイルとは、音楽作品やレコードを沖縄、日本、海外における沖縄系エスニック・コミュニティに向けて発信するスタイルである。一方、〈外向き〉発信スタイルとは、沖縄と異なる言語、文化、生活習慣をもつ社会的集団及び他文化社会へ向けて発信される音楽の志向を指す。

〈内向き〉〈外向き〉という問題は「外部との接触から起きる流用（appropriation）によって文化が創造」（太田 1998:47）されるという現象を浮き彫りにする。田辺の調査は明らかに「外部との接触」であり、沖縄にルーツをもたない人々や社会に向けて、いかなる音楽を発信し得るかという課題を沖縄の人々に突きつけた。

7.2 柳田国男の人的ネットワークの活用

田辺は山内、宮良、中村、金城など沖縄出身の研究者、音楽教育者と交流を深める中で、沖縄音楽への興味を深めていった。とりわけ、1921年に沖縄調査を実施した柳田から、八重山民謡の研究を強く勧められた。沖縄調査を記録した1922年7月30日『沖縄タイムス』、田辺 1922a年9月、田辺 1923d年3月、田辺 1922n年11月、田辺 1923fには、柳田の推薦と調査実施の経緯が詳述されている。八重山調査の案内役を務めた喜舎場、岩崎も柳田から紹介された人物であった。さらに、八重山調査では柳田から岩崎に送られた写声蓄音器を民謡の録音に使用した。

以前から学術的交流のあった柳田の人的ネットワークを最大限に活かし、田辺の調査は実施された。そして、山内による音楽解説、音楽理論の提供なくして、調査は成功しなかったのである。

また、田辺は同行した大橋、沖縄タイムス記者の上間、宿泊所を提供した魚住、尚家の音楽鑑賞に尽力した尚琳ら、調査に全面的に協力した人々の様子を詳細に記録した。古典音楽演奏家としては金武、城間、伊差川、知念、饒平名、安元、沖縄民謡演奏家としては富原の名が記載されている。特に、資料2～9は沖縄側が提供した文字資料であり、それらを基にメモを取りながら音楽鑑賞に臨んだ田辺の姿が想像される。

7.3 レコード技師の派遣と音楽録音

田辺の調査目的は「琉球における歴史的の研究と八重山における世界的民謡を調べる」（田辺 1922d年9月24日）ことであった。八重山民謡を調査することが最大の目的であった田辺にとって、琉球古典音楽や沖

縄民謡は最優先させる音楽ではなかった。それゆえ、既に大阪蓄音器が商業録音し、レコード化されていた琉球古典音楽や沖縄民謡はレコード購入で済ましている。

また、田辺は最終的にレコード技師を派遣して沖縄音楽を録音し、レコード制作の実現を目指していた。「琉球音楽の調査は…中略…簡単な吹込みをして貰った後技師を遣って完全にしようと思うのです」（1922年7月27日『沖縄タイムス』）という言葉通り、1926年、日東蓄音器株式会社（ニッソー・レコード）により八重山民謡レコード23枚が制作される（高橋 2010参照）。1926年当時、商業録音による八重山民謡レコードは発売されていなかった。つまり、蓄音器で聴ける八重山民謡レコードが存在しなかったのである。それゆえ、田辺はプライベート盤のレコードを制作し、八重山民謡研究の集大成を目指したと考えられる。

筆者が高橋 2010を執筆した当時は、日東蓄音器の八重山民謡レコードが誰の企画・後援によるものであるかが不明であった。だが、本研究により田辺が大きく関わっていた可能性が高くなった。その要因として、田辺が日東蓄音器と個人的に密接な関わりがあったことが挙げられる。

第1に、田辺の妻・八重子は家庭踊のSPレコード『春の弥生、一つとや』を日東蓄音器で録音、発売していた。「ツバメ印ニッソーレコードの目録」（1923『音楽と蓄音機』10巻2号）には同SPの情報が掲載されている。さらに、同巻同号掲載の「写真 家庭踊レコード吹込記念撮影」には日東蓄音器取締役・勝田忠一、日東蓄音器技師長・福永幸三、田辺尚雄・八重子夫妻の姿が確認できる。

第2に、田辺は1923年樺太調査でアイヌ、ギリヤーク、オロッコ等の音楽を録音した後、音源のレコード化を日東蓄音器に依頼していた（田辺 1965:408参照）。田辺は日東蓄音器専務・森下辰之助と懇意にしており、信頼関係が成立していたからこそ、貴重な録音音源（原盤）を委託したのであろう。

以上2点により、日東蓄音器の八重山民謡レコード制作に田辺が関わっていたことを指摘できる。

7.4 八重山民謡ユンタ・ジラバへの高い評価

田辺は玉城、新垣による琉球舞踊を高く評価していた。特に、玉城を9代目市川團十郎に例えて紹介した記述は、その後、玉城らが東京で組踊や舞踊を上演する際に、影響を与えたと推察される。

また、琉球古典音楽に関しては、音響、歌詞、三線奏法などから受けた印象を真摯に記録している。さら

に、富原の早弾き三線による沖縄民謡には技術的な評価はするものの、興味を抱くには至らなかった。

八橋流箏曲については尚侯爵家で楽器を拝見し、見晴亭で玉城等による演奏を実際に聴いていた。そして、日本本土で衰退した八橋流箏曲が沖縄で現存している事実に驚愕を隠せなかった。3.1.1 で述べたように、1920年9月琉球の箏曲「六段」は日本本土の「六段」とほぼ同一であるという情報を中原から事前に入手していた。直筆の『音楽見聞録』に記載があるため、この情報を沖縄調査で実際に確認したいという希望があったと推察される。

田辺は八橋流箏曲を初め、日本本土の音楽と歴史的関係の深い事象には強い興味を示し、演奏家を招聘するなど貪欲に調査研究を進めた。一方、琉球国時代(1429-1879)に首里の士族層により育まれた琉球古典音楽にはさほど興味を示さず、研究者として演奏記録を残したに過ぎなかった。

田辺が最も高く評価したのは八重山諸島のユンタ・ジラバであった。既に1922年8月1日に鑑賞済みのユンタ・ジラバを、田辺が強く希望し、翌8月2日にも上演させている。そして、島民に「ユンタ・ジラバを習いたい」と所望した上で《ジラバガヌ、ソウソウ、ジラバ》《浦船ジラバ》を採譜し、録音も試みた。田辺はユンタ、ジラバ、アヨーをハーモニーが備わった民謡と捉え、「世界第一の歌」と褒め讃えた。田辺のこの指摘には、大正期の日本における西洋音楽の優位性も垣間見える。

調査から10年後、田辺は《ジラバガヌ、ソウソウ、ジラバ》について「私は石垣島でこれを聴いた時には彼等の真実味に感嘆したが、これを東京へ呼び出して、青年会館やラヂオで聞いた時には何等の興味も起こらなかった」(田辺1932年2月:8)と述べている。調査時における驚きと感動が東京での上演では甦らず、印象が変化したことが確認できる。この点の解明については、次稿を待ちたい。

謝辞

本論をまとめるにあたり、沖縄県立芸術大学附属図書館、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、国立劇場調査養成部には貴重な文献・音源資料を御提供いただいた。

本稿は2015年11月1日、東洋音楽学会第66回大会(於:東京芸術大学)における研究発表「田辺尚雄の沖縄・八重山諸島音楽現地調査(1922年)―『田辺文庫』を基礎資料として―」の発表原稿を大幅に加筆修正したものである。

本研究は、日本学術振興会科学研究費(平成26~27年度、挑戦的萌芽研究26580036:研究代表者・高橋美樹)「沖縄における録音・レコード音楽の黎明期研究―田辺尚雄の沖縄現地調査を起点として」の助成を受けたものである。

注

- 1) 田辺尚雄編輯「(廿四) [琉球の音楽]」『音楽見聞録』第壹集、p.18参照。『音楽見聞録』全53冊(1920-1977)は田辺直筆による研究記録で国立劇場に所蔵されている。琉球関連の記録は、田辺尚雄編(遺稿)1985「連載 田辺尚雄 音楽見聞録(2)」『季刊邦楽』43号、邦楽社、58-62に掲載された。
- 2) 「この人物は学生当時、金城義昌だった。のちに改名して中村完爾となる」三島2014:72参照。
- 3) 宮良1960年12月:69では、1921年4月18日三越流行会での柳田の講演「八重山の歌と歴史」が報告されている。出席者の座席を図で示し、宮良が使用した三線の素材も解説した。
- 4) 宮良の日記「6月30日(水)晴。金田様は柳田先生へ電話で面会を問い合わせられた処、快諾とのこと。2人は早速電車で走らせた。面会は約1時間であった。先生は『旧記』などは是非見たい、そして庫へ仕舞って置くから火災などの虞れはないと仰せられ、又複写したいものもあろうといわれた」宮良1984:252-253参照。
- 5) 宮良1984:326には「(筆者注:1922年)5月1日(月)岡村様が御来訪。喜舎場様の民謡の原稿が届いたといって喜んで持って来られた、僕も嬉しかった」と、柳田と交流が深く、郷土研究社を設立した岡村千秋に喜舎場の原稿が渡った記述がある。
- 6) 1922年6月14日「(広告)平和記念東京博覧会／三浦環女史出演」『朝日新聞』朝刊、p.6参照。1922年6月17日「環さんの独唱」『朝日新聞』夕刊、p.2参照。
- 7) 宮良1984:326には、「5月1日(月)喜舎場様を案内して、靖国神社、博文館、三越から折口、田辺の両氏を訪問した」とある。
- 8) 山内1922(月日不明)「田辺尚雄先生を迎ふ」『沖縄タイムス』には「四五年前迄は書信で通信教授を受けた。多少組織を異にせる琉楽の理論を発見する事が出来たのも全く師の御誘導の賜である」と田辺と山内の師弟関係が記されている。
- 9) 「金城義昌兄と私は先生の説明役に県から指定されたので、先生に接する機会が最も多かった」山内1922年10月:72参照。

10) 「那覇港の北岸にあった料亭、元は御物城(オモノグスク)と称して海外貿易で運んできた物資をこの宝庫へ貯蔵した」親泊朝擢編 1917『沖縄県写真貼第一輯』p. 109 参照、風月楼の写真も確認できる。復刻版は 1981『写真集 望郷・沖縄第 2 巻』本邦書籍。

11) 1922 年 7 月 28 日「第 2 日目の田辺氏／尚家で古楽器 尚琳家で演奏会」『沖縄タイムス』参照。1922 年 7 月 27 日、尚琳男爵邸で行われた琉球古典音楽の演奏家に関する情報はこの記事のみである。

参考文献

植村幸生 1997「植民地期朝鮮における宮廷音楽の調査をめぐって：田辺尚雄『朝鮮雅楽調査』の政治的文脈」『朝鮮史研究会論文集』35 号、pp. 117-144

植村幸生 2003「日本人による台湾少数民族音楽の研究—田辺・黒沢・小泉の業績を中心に」『上越教育大学研究紀要』22 巻 2 号、pp. 301-313

太田好信 1998『トランスポジションの思想』世界思想社

大藤時彦・柳田為正編 1981『柳田国男写真集』岩崎美術社

岡田則夫、1991 年 8 月「第 11 回 続・蒐集奇談」『レコード・コレクターズ』ミュージック・マガジン社、pp. 118-123

角川書店編集部編 1961「お蝶夫人＝三浦環自伝、三浦環著、吉本明光編」『世界の間人 2』角川書店、pp. 361-463。初出は三浦環 1947 吉本明光編『お蝶夫人＝三浦環自伝』右文社

勝連繁雄 1999『改訂 歌三線の世界』ゆい出版

喜舎場永珣 1924『八重山島民謡誌』郷土研究社

喜舎場永珣 1934 年 10 月 21 日「連載第 1 回 死線を越えてレコードの旅へ」『八重山民報』

喜舎場永珣 1970「郷土とユンタ」浦原啓作『八重山ユンタ集』音楽之友社、pp. 2-3

喜舎場永珣 1977『八重山民俗誌 下巻』沖縄タイムス社

久万田晋 1996「第 8 章 民族音楽における沖縄の発見」『沖縄地区大学放送公開講座 琉球に魅せられた人々』琉球大学公開講座委員会、pp. 81-89

久万田晋 2005「沖縄の音楽からみる和声」『21 世紀の音楽入門』教育芸術社、pp. 82-91

小泉文夫 1983「アジアの中の沖縄音楽」『新沖縄文学』58 巻、沖縄タイムス社、pp. 44-51

小泉文夫 1986「音階理論から見た沖縄音楽の古層」『1982 年法政大学第 7 回国際シンポジウム 沖縄文化の古層を考える』法政大学出版局、pp. 204-219

小島美子 1981『歌をなくした日本人』音楽之友社

古塚達朗 2008「ジュリうま」『沖縄民俗辞典』吉川弘文館、p. 265

篠原智花・笹倉いる美 2007「北海道立北方民族博物館所蔵の田辺尚雄氏樺太調査関連資料について(1)」『北海道立北方民族博物館研究紀要』16 号、pp. 77-98

篠原智花・笹倉いる美 2008「北海道立北方民族博物館所蔵の田辺尚雄氏樺太調査関連資料について(2)」『北海道立北方民族博物館研究紀要』17 号、pp. 59-72

鈴木聖子 2014『「科学」としての日本音楽研究：田辺尚雄の雅楽研究と日本音楽史の構築』東京大学大学院人文社会系研究科博士論文

高橋美樹 2003「戦後沖縄における民謡歌手の変容 — 世代別活動スタイルの比較を通して—」『ポピュラー音楽研究』6 号、日本ポピュラー音楽学会、pp. 17-37

高橋美樹 2010「近代沖縄における録音メディアの導入 — ニットーレコード制作の八重山民謡 S P 盤を対象として—」『沖縄県立芸術大学附属研究所紀要 沖縄芸術の科学』22 号、pp. 91-122

高橋美樹 2011「レコードに初めて録音された沖縄音楽—1915 年『琉球新報』と大阪蓄音器の活動を通して—」『高知大学教育学部研究報告』71 号、pp. 229-242

高橋美樹 2012「沖縄音楽レコードにおける〈媒介者〉の機能 — 1930 年代・日本コロムビア制作の S P 盤を対象として」細川周平編著『民謡からみた世界音楽—うたの地脈を探る』ミネルヴァ書房、pp. 175-192

高橋美樹 2015「《安里屋ユンタ》の伝播・普及プロセス — レコードの分析を中心として—」『高知大学教育学部研究報告』75 号、pp. 203-232

高橋美樹 2017（近刊）「日劇ダンシング・チームと琉球レビュー — 《安里屋ユンタ》の上演をめぐって—」『沖縄県立芸術大学附属研究所紀要 沖縄芸術の科学』29 号

田辺尚雄 1922a 年 9 月「琉球及八重山群島音楽研究旅行記(1)」『音楽と蓄音機』9 巻 9 号、pp. 34-42

田辺尚雄 1922b 年 10 月「琉球及八重山群島音楽研究旅行記(2)」『音楽と蓄音機』9 巻 10 号、pp. 34-43

田辺尚雄 1922c 年 11 月「琉球及八重山群島音楽研究旅行記(3)」『音楽と蓄音機』9 巻 11 号、pp. 39-48

田辺尚雄 1922d 年 9 月 24 日「世界第一の民謡を持つ八重山(1)」『東京日日新聞』

田辺尚雄 1922e 年 9 月 26 日「世界第一の民謡を持つ八重山(2)」『東京日日新聞』

田辺尚雄 1922f 年 9 月 28 日「世界第一の民謡を持つ八重山(3)」『東京日日新聞』

田辺尚雄 1922g 年 9 月 29 日「世界第一の民謡を持つ八

- 重山(4)『東京日日新聞』
- 田辺尚雄 1922h 年 9 月 30 日「世界第一の民謡を持つ八重山(5)『東京日日新聞』
- 田辺尚雄 1922i 年 10 月 1 日「世界第一の民謡を持つ八重山(6)『東京日日新聞』
- 田辺尚雄 1922j 年 10 月 2 日「世界第一の民謡を持つ八重山(7)『東京日日新聞』
- 田辺尚雄 1922k 年 10 月 3 日「世界第一の民謡を持つ八重山(8)『東京日日新聞』
- 田辺尚雄 1922l 年 10 月 4 日「世界第一の民謡を持つ八重山(9)『東京日日新聞』
- 田辺尚雄 1922m 年 10 月 5 日「世界第一の民謡を持つ八重山(10)『東京日日新聞』
- 田辺尚雄 1922n 年 11 月「八重山群島の民謡」『詩と音楽』1 卷 3 号、pp. 71-77
- 田辺尚雄 1923a 年 1 月「朝鮮・琉球・台湾の音楽」『女性改造』2 卷 1 号、pp. 83-94
- 田辺尚雄 1923b 年 1 月「琉球及八重山群島音楽研究旅行記(4)『音楽と蓄音機』10 卷 1 号、pp. 58-61
- 田辺尚雄 1923c 年 2 月「琉球及八重山群島音楽研究旅行記(5)『音楽と蓄音機』10 卷 2 号、pp. 12-26
- 田辺尚雄 1923d 年 3 月「琉球及八重山群島音楽研究旅行記(6)『音楽と蓄音機』10 卷 3 号、pp. 20-42
- 田辺尚雄 1923e「台湾及琉球の音楽に就きて」笠森伝繁編『(財)啓明会 第 8 回講演集』
- 田辺尚雄 1923f『第一音楽紀行』文化生活研究会
- 田辺尚雄 1927『島国の唄と踊』磯部甲陽堂
- 田辺尚雄 1932 年 2 月「郷土音楽」『郷土史研究講座』5 号、雄山閣、pp. 1-37
- 田辺尚雄 1965『明治音楽物語』青蛙房
- 田辺尚雄 1968 東洋音楽学会編『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』音楽之友社
- 田辺尚雄編輯「(廿四)〔琉球の音楽〕」『音楽見聞録』第 1 集、p. 18(国立劇場所蔵)。左記は、田辺尚雄編(遺稿)1985「連載 田辺尚雄 音楽見聞録(2)」『季刊邦楽』43 号、邦楽社、58-62 掲載
- 田辺秀雄 1978「1977 年定例研究会(4 月～10 月)発表要旨／田辺尚雄大正 11 年樺太、台湾高砂族、琉球、昭和 7 年南洋現地音楽調査録音盤及び録音器について」『東洋音楽研究』43 号、東洋音楽学会、pp. 160-162
- 仲宗根源和編 1933『沖縄県人物風景写真帖』沖縄県人物風景写真帖刊行会
- 日外アソシエーツ編 1998『芸能人物事典 明治大正昭和』
- 日外アソシエーツ編 2004『20 世紀日本人名事典』
- 波照間永吉 1983「節歌」『沖縄大百科事典(下)』沖縄タイムス社、p. 364
- 三島わかな 2014『近代沖縄の洋楽受容』森話社
- 宮良当壮 1960 年 12 月「風雪」『月刊 琉球文学』1 卷 12 号、武蔵野女子学院短期大学琉球文学講座、pp. 60-79
- 宮良当壮 1984『宮良当壮全集 20』第一書房
- 村上呂里 2006「宮良当壮と柳田国男の間一言語教育論をめぐって」『琉球大学教育学部紀要』68 集、pp. 27-48
- 山内盛彬 1922a 年(月日不明)「田辺尚雄先生を迎ふ」『沖縄タイムス』
- 山内盛彬 1922b 年 4 月 30 日「田辺尚雄氏歓迎音楽会演奏者の方々へ」『沖縄タイムス』
- 山内盛彬 1922c 年 5 月(日不明)「田辺氏研究会と演奏曲目に対する希望」『沖縄タイムス』
- 山内盛彬 1922d 年 7 月 7 日「琉球の舞楽危急存亡の秋／田辺尚雄氏の来県は保存の好機」『沖縄タイムス』
- 山内盛彬 1922e 年 10 月「田邊先生来県印象記」『音楽と蓄音機』9 卷 10 号、pp. 72-77
- 山内盛彬 1980 年 10 月 17 日「私の戦後史(3)」『沖縄タイムス』夕刊、p. 1
- 山本華子 2008「李王職雅楽部の研究—植民地時代朝鮮の宮廷音楽伝承—」東京芸術大学博士学位論文
- 山本華子 2011『李王職雅楽部の研究』書肆フローラ
- 1921 年 1 月「11 月の流行会」『三越』11 卷 1 号、p. 23
- 1921 年 5 月「3 月と 4 月の流行会」『三越』11 卷 5 号、p. 32
- 1922 年 3 月 26 日「宮内省雅楽部講師田辺理学士が 4 月下旬来県す」『沖縄タイムス』
- 1922 年 4 月 4 日「宮内省雅楽部講師 田辺尚雄氏歓迎と本社」『沖縄タイムス』
- 1922 年 4 月 7 日「田辺尚雄氏は八重山の音楽も研究すべく上陸」『沖縄タイムス』
- 1922 年 4 月 11 日「田辺氏歓迎打合わせ」『沖縄タイムス』
- 1922 年 5 月 9 日「田辺尚雄氏は改めて来県に決す」『沖縄タイムス』
- 1922 年 6 月 27 日「琉球音楽調査の田辺氏は愈来県」『沖縄タイムス』
- 1922 年 7 月 12 日「大に歓迎せよ 田辺氏の来県」『沖縄タイムス』
- 1922 年 7 月 19 日「田辺氏愈々 20 日出発／24 5 日頃に来県せん」『沖縄タイムス』
- 1922 年 7 月 27 日「田辺氏昨朝来県」『沖縄タイムス』
- 1922 年 7 月 28 日「第 2 日目の田辺氏／尚家で古楽器尚琳家で演奏会」『沖縄タイムス』

1922年7月29日「盛況を極めた田辺氏講演会」『沖縄タイムス』

1922年7月30日「仲村渠節に感動／紋付羽織袴で威儀を正して聴く田辺さん」『沖縄タイムス』

1922年8月15日「田辺尚雄氏に贈りたる音楽舞踊のしをり」『先島新聞』p.3

1922年8月17日(16日夕刊)「お国歌舞伎若衆歌舞伎が昔の儘に残る琉球／すべてが古い姿を伝えて田辺尚雄氏談」『東京毎夕新聞』

1922年8月24日「民族的感情を知るには歌や踊を調べたら一番好く了解する／田辺尚雄氏談」『国民新聞』

2012年6月13日「没後50年を記念柳田国男展覧会」『朝日新聞』p.28

2013『特別展図録 柳田国男の生涯』遠野市立博物館

参考音源

LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』（TW-80011、東芝EMI、1978）

表1 「田辺尚雄における沖縄音楽調査・関連年表」

作成：高橋美樹

| 西暦 | 元号 | 沖縄・八重山の出来事 | 日本本土の出来事 |
|------|------|--|---|
| 1915 | 大正4 | | 大阪蓄音器(ナショナル・レコード)琉球古典音楽・沖縄民謡のレコード発売 |
| 1920 | 大正9 | | 6月29日、宮良当壮が折口信夫の自宅を訪問。 |
| 1920 | 大正9 | | 6月30日、宮良当壮が金田一京明と柳田国男宅を訪問、初めて面会 |
| 1920 | 大正9 | | 田辺は沖縄出身の中原はる子から琉球の三線や箏に関する話を聞く |
| 1920 | 大正9 | | 11月7日、宮良当壮、八重山土俗展覧会で講演し民謡を歌う |
| 1921 | 大正10 | 1月3日-2月15日柳田国男が沖縄調査を実施。八重山の案内役は喜舎場永珣 | |
| 1921 | 大正10 | | 3月18日、三越3月流行会で田辺は柳田から八重山民謡の研究を勧められる |
| 1921 | 大正10 | | 4月18日、三越4月流行会で柳田が講演「八重山の歌と歴史」開催。 宮良当壮は八重山民謡を三線伴奏で美演。 |
| 1921 | 大正10 | 7~8月、折口信夫が沖縄本島、久高島、津堅島調査 | |
| 1922 | 大正11 | | 3月9日、宮良は田辺宅を訪問。民謡を三線伴奏で美演 |
| 1922 | 大正11 | | 3月16日、宮良は田辺宅を訪問し、三線楽譜『工工四』貸借し筆写 |
| 1922 | 大正11 | | 3月22日、宮良は田辺を宮良当陳、宮良当奉、岩崎卓爾らに紹介 |
| 1922 | 大正11 | | 3月24日、宮良は田辺宅を訪問 |
| 1922 | 大正11 | | 3月25日~4月26日、田辺は台湾調査実施。八重山調査は中止 |
| 1922 | 大正11 | 4月9日、田辺の歓迎打合わせ会を沖縄タイムス社で開催 | |
| 1922 | 大正11 | | 4月15日、喜舎場永珣が他府県学事視察のため上京 |
| 1922 | 大正11 | | 4月17日、喜舎場は岩崎と柳田宅を訪問、『八重山島民謡誌』の原稿を提出 |
| 1922 | 大正11 | | 4月21日、喜舎場と岩崎は南島談話会に出席 |
| 1922 | 大正11 | | 4月26日、田辺は台湾調査から東京駅に到着 |
| 1922 | 大正11 | 4月30日、山内盛彬は田辺に披露するべき沖縄音楽を『沖縄タイムス』で提案 | |
| 1922 | 大正11 | 5月、山内は田辺の沖縄調査における演奏曲目提案書を沖縄タイムス社に送る | |
| 1922 | 大正11 | | 5月1日、喜舎場が田辺宅を訪問し、八重山調査の再実施を懇願 |
| 1922 | 大正11 | | 5月3日、喜舎場、東京を出発。 沖縄出身者たちから調査の再実施に関する問合せ状が数多く届く |
| 1922 | 大正11 | 5月9日、田辺が金城義昌への手紙『沖縄タイムス』掲載。7月沖縄来県と報じる | |
| 1922 | 大正11 | 6月27日、田辺から金城に7月20日東京出發、沖縄来県、八重山希望と通知届く | |
| 1922 | 大正11 | 7月16日、田辺の歓迎打合わせ会を沖縄タイムス社で開催 | |

| | | | |
|------|------|--|---------------------------------------|
| 1922 | 大正11 | 7月20日-30日、田辺は沖縄本島の音楽調査を実施 | |
| 1922 | 大正11 | 7月31日、田辺は宮古島の音楽調査を実施 | |
| 1922 | 大正11 | 8月1日-3日、田辺は八重山諸島の音楽調査を実施。案内役は岩崎と喜舎場 | |
| 1922 | 大正11 | 8月2日、田辺は八重山で《ジラバガス、ソウソウ、ジラバ》《浦船ジラバ》採譜、録音 | |
| 1922 | 大正11 | 11月15日、宮良は柳田が沖縄から持参した写本類調査のため折日宅を訪問 | |
| 1923 | 大正12 | 7月20日-9月4日、折日信夫は沖縄本島、宮古島、石垣島調査を実施 | |
| 1924 | 大正13 | | 4月、喜舎場『八重山島民謡誌』郷土研究社から刊行 |
| 1925 | 大正14 | | 4月、田辺、歌舞伎舞踊劇『与那国物語』公演（於：歌舞伎座） |
| 1926 | 大正15 | | 日東蓄音器（ニットー・レコード）八重山民謡レコード23枚制作 |
| 1928 | 昭和03 | | 4月「第3回郷土舞踊と民謡の会」八重山芸能公演（於：日本青年館他） |
| 1928 | 昭和03 | 宮良当壮・宮良長包『八重山古謡』刊行 | |
| 1928 | 昭和03 | | 6月、田辺、歌舞伎舞踊劇『与那国物語』公演（於：明治座） |
| 1932 | 昭和07 | | 2月、田辺、歌舞伎舞踊劇『与那国物語』公演（於：浅草松竹） |
| 1934 | 昭和09 | | 日本コロムビア・レコード、沖縄宮古八重山諸島の民謡を録音、発売。 |
| 1936 | 昭和11 | | 日本民俗協会主催「琉球古典芸能大会」組踊、舞踊公演（於：日本青年館） |
| 1939 | 昭和14 | | 7月、日劇ダンシング・チームが琉球レビュー公演（於：日本劇場） |
| 1940 | 昭和15 | | 4月、日劇ダンシング・チームがレビュー「八重山群島」公演（於：日本劇場） |
| 1940 | 昭和15 | | 9月、日劇ダンシング・チームがレビュー「琉球と八重山」公演（於：日本劇場） |
| 1943 | 昭和18 | | 2月、日劇ダンシング・チームがレビュー「八重山乙女」公演（於：日本劇場） |
| 1948 | 昭和23 | | 4月、日劇ダンシング・チームがレビュー「琉球と八重山」再演（於：日本劇場） |

【註】日劇ダンシング・チームは1940年9月に東宝舞踊隊へ改称し、1948年4月に日劇ダンシング・チームの名称を復活させた。

よって、1940年「琉球と八重山」公演、1943年「八重山乙女」公演は東宝舞踊隊という名称で開催している。